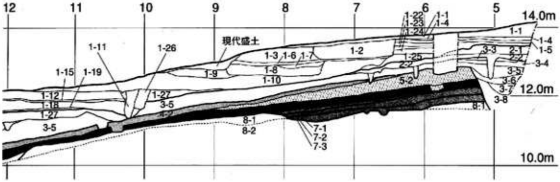
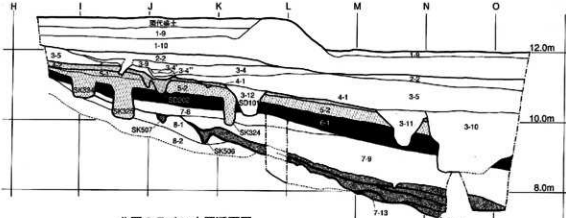




北区９ライン土層断面図

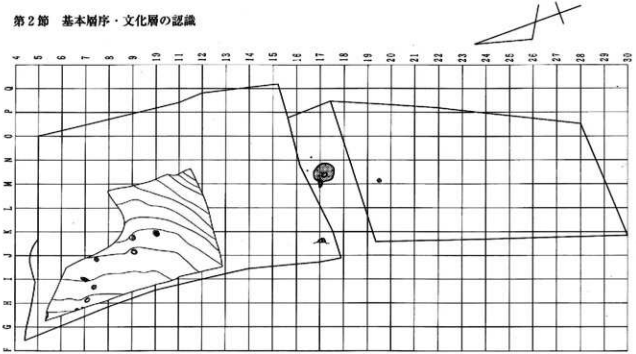
南区土層

No.	色調記号	土色名	粒度等	備考
0層	5B 4/1	暗青灰	シルト質極細砂	弥生～古代以降
1層	2.5Y 5/2	暗灰黄	細砂　長石・石英粗砂～細礫混り	
2層	7.5YR 3/1	黒褐	細砂　長石・石英粗砂～細礫混り	
3層	2.5Y 6/3	にぶい黄	細砂　長石・石英粗砂～細礫混り	
4層	2.5Y 3/1	黒褐	細砂　長石・石英粗砂～細礫混り	
4'層	10YR 7/6	明黄褐	中砂	縄文晩期突帯文土器含む流路
4''層	10BG 4/1	暗青灰	極細砂	縄文晩期突帯文土器含む流路
5層	10YR 2/1	黒	細砂　長石・石英粗砂～細礫混り	縄文土器包含
5'層	5B 3/1	暗青灰		
5''層	10G 2/1	緑黒		
6a層	7.5Y 5/2	灰オリーブ	細砂　長石・石英粗砂～細礫混り	ラミネーション
6b層	10Y 5/2	オリーブ灰	細砂　長石・石英粗砂～細礫混り	ラミネーション
7層	5B 5/1	青灰	シルト	縄文遺物あり
8層	N 2/	黒	シルト質極細砂　長石・石英粗砂～細礫混り	[illegible] 縄文遺物多量
9層	10YR 3/3	暗褐	細砂　長石・石英粗砂～細礫混り	[illegible] 縄文遺物多量
10層	5B 4/1	暗青灰	シルト	縄文遺物あり
11層	10G 5/1	緑灰	シルト質極細砂に暗色砂層のラミナ	
11'層	2.5Y 5/2	暗灰黄	極細砂～中砂	
12層	2.5Y 8/6	黄	粗砂	
12'層	2.5Y 7/6	明黄褐	極細砂	
13層	N 3/	暗灰	シルト	縄文遺物あり
14層	N 3/	暗灰	極細砂～細砂	縄文遺物あり，骨多し
15層	5GY 6/1	オリーブ灰	極細砂	
16a層	7.5GY 5/1	緑灰	中～細砂　暗色砂層とのラミナ	堤表面へ一部(15～17層)
16b層	7.5GY 5/1	緑灰	中～細砂　暗色砂層とのラミナ	
17層	5GY 2/1	オリーブ黒	シルト	
18層	5G 4/1	暗緑灰	シルト、細砂混じり	
19層	10G 4/1	暗緑灰	シルト、細砂混じり	
20層	10YR 7/6	明黄褐	シルト、細砂混じり	
21層	2.5Y 5/2	暗灰黄	シルト、細砂混じり	
22層	7.5YR 8/1	灰白	中砂～極細砂	
22'層	5Y 6/3	オリーブ黄	細砂	
22''層	2.5Y 8/1	灰白	細砂	
23層	5BG 3/1	暗青灰	シルト質細砂	縄文遺物あり、炭化物多し
23'層	10YR 4/2	灰黄褐	中砂～細礫	
24層	2.5GY 8/1	灰白	極細砂	
25層	5BG 3/1	暗青灰	シルト質細砂、極粗砂混じり	
29層	5BG 5/1	青灰	極細砂	アカホヤ火山灰二次堆積含む
30層	5GY 2/1・5BG 5/1	オリーブ黒・青灰	シルト・極細砂の互層	アカホヤ火山灰二次堆積含む
31層	5YR 3/2	暗赤褐	シルト、細砂混じり	有機質
32層	10YR 6/6	明黄褐	アカホヤ火山灰	
33層	5G 5/1	緑灰	細砂，粗砂混じり	
34層	10GY 8/1	明緑灰	中～細砂	[illegible]
35層	7.5Y 3/2	オリーブ黒	シルト、細砂混じり	
36層	10G 6/1	緑灰	細砂	
37層	5Y 4/1	灰	シルト質極細砂	泥炭
38層	7.5Y 5/1	灰	シルト質極細砂	炭含む
39層	10Y 7/1	灰白	細砂	
40層	7.5YR 5/1	褐灰	シルト	泥炭含む

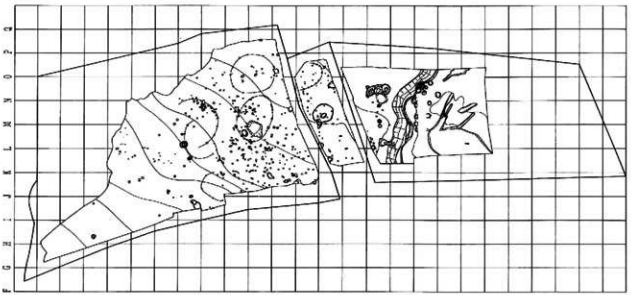
北区土層

No.	色調記号	土色名	粒度等	備考
1-1層	5Y 4/1	灰	極細砂	現代水田土壌
1-2層	2.5Y 7/4	浅黄	細砂	現代盛土
1-3層	5Y 3/1	灰	砂～極細砂	現代水田土壌
1-4層	7.5YR 7/3	にぶい橙	極細砂、小礫混じり	現代水田床土
1-5層	10GY 6/1	緑灰	極細砂、小礫混じり	現代水田土壌
1-6層	7.5YR 7/6	橙	極細砂、小礫混じり	現代水田床土
1-7層	5Y 7/1	灰白	細砂	現代水田土壌
1-8層	2.5Y 7/6	明黄褐	細砂、中礫混じり	現代盛土
1-9層	7.5Y 5/1	灰	極細砂、小礫混じり	現代水田土壌
1-10層	2.5Y 7/4	浅黄	極細砂、小～中礫混じり	現代水田土壌・床土
1-11層	10Y 6/1	灰	砂～細砂	現代水田
1-12層	10Y 5/1	灰	極細砂	現代水田土壌
1-13層	10Y 4/1	灰	極細砂、粗砂混じり	現代水田土壌
1-14層	5Y 7/1	灰白	細砂	水田埋め
1-15層	5YR 6/6	橙	極細砂	現代水田床土
1-16層	10Y 6/1	灰	極細砂	現代水田土壌・床土
1-17層	10Y 6/2	オリーブ灰	中砂	水田土壌
1-18層	5Y 7/2	灰白	極細～細砂	近世水田土壌・床土
1-19層	5YR 5/4	にぶい赤褐	中砂	近世水田床土
1-20層	10Y 6/1	灰	極細砂、中礫混じり	埋め
1-21層	10GY 4/1	暗緑灰	細砂	水田土壌
1-22層	10YR 7/2	にぶい黄橙	極細砂、小礫混じり	中近世水田土壌・床土
1-23層	10YR 7/2	にぶい黄橙	極細砂、小礫混じり	中近世水田土壌・床土
1-24層	10YR 7/2	にぶい黄橙	極細砂、小礫混じり	中近世水田土壌・床土
1-25層	10YR 7/2	にぶい黄橙	極細砂、小礫混じり	中近世水田土壌・床土
1-26層	5Y 7/1	灰白	極細砂	中近世水田
1-27層	5YR 6/1	褐灰	細砂、中礫混じり	中近世包含層
1-28層	5BG 5/1	青灰	細砂	水田土壌
2-1層	10YR 6/4	にぶい黄橙	細砂、中礫混じり	中世包含層
2-2層	2.5Y 5/2	暗灰黄	細砂～粗砂	中世包含層、下面にて遺構
3-1層	10YR 7/6	明黄褐	細～中砂	
3-2層	10YR 5/3	にぶい黄褐	中～細砂	流内
3-3層	2.5Y 7/4	浅黄	中砂	
3-4層	7.5YR 4/2	灰褐	細砂～細砂	
3-4'層	5Y 6/1	灰	細砂	
3-4''層	5Y 7/2	灰白	極細砂	
3-5層	7.5YR 3/1	黒褐	シルト質細砂～極細砂	
3-6層	10Y 5/1	灰	シルト質極細砂	流路内堆積
3-7層	7.5YR 5/4	にぶい褐	極細砂	流路内堆積
3-8層	N 3/	暗灰	シルト質極細砂	流路内堆積
3-9層	7.5YR 4/1	褐灰	細砂、粗砂混じり	弥生土器包含
3-10層	10G 4/1	暗緑灰	細砂	
3-11層	7.5Y 7/1	灰白	中砂～細砂、ラミナ、黄灰土混じり	自然流路
3-12層	7.5Y 6/1	灰	細砂	自然流路（SD101）
4-1層	5Y 7/4	浅黄	細砂～中砂	
4-2層	10YR 3/1	黒褐	シルト質極細砂	縄文土器、下面にて遺構
5-1層	7.5YR 5/4	にぶい褐	細～極細砂	縄文中期
5-2層	2.5Y 7/4	浅黄	極細砂	縄文中期、下面にて遺構
5-3層	10YR 2/3	黒褐	細砂	縄文土器含む
5-4層	5Y 3/1	オリーブ黒	細砂	縄文土器含む
5-5層	5Y 8/2	灰白	細砂、ラミナ	
5-6層	5Y 4/1	灰	細砂	
6-1層	2.5Y 4/1	黄灰	シルト質極細砂	縄文下層、下面にて遺構
7-1層	2.5Y 6/2	灰黄	極細砂	
7-2層	7.5YR 4/4	褐	シルト質細砂、小～中礫混じり	縄文最下層遺物包含
7-3層	10YR 4/2	灰黄褐	シルト質細砂、小～中礫混じり	縄文最下層、下面にて遺構
7-4層	7.5Y 4/1	灰	シルト質細砂	
7-5層	5Y 2/2	オリーブ黒	中砂	
7-6層	N 3/	暗灰	シルト質細砂	縄文土器含む
7-7層	5Y 7/4	浅黄	細砂	
7-8層	5BG 6/1	青灰	粗～極細砂	
7-9層	5BG 7/1	明青灰	シルト質細砂～極細砂	
7-10層	10G 2/1	緑黒	シルト質極細砂	縄文最下層、サヌカイト含む
7-11層	10GY 4/1	暗緑灰	シルト質極細砂～細砂	縄文最下層
7-12層	5Y 4/1	灰	極細砂～細砂、小～中礫混じり	縄文最下層
7-13層	5G 7/1	明緑灰	細砂	縄文最下層
7-14層	5GY 6/1	オリーブ灰	中砂、シルトブロック混じり	縄文最下層
8-1層	2.5Y 7/3	浅黄	細砂	ベース
8-2層	2.5Y 8/6	黄	シルト質極細砂	ベース

第14図　土層断面図－２

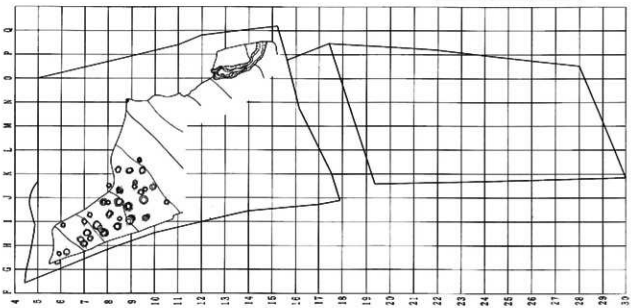


縄文最下層の遺構



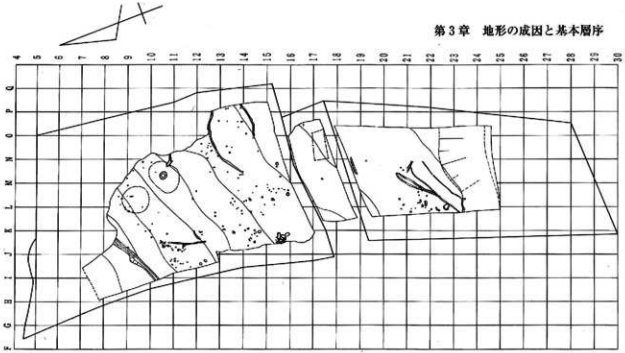
縄文下層の遺構

0　30m

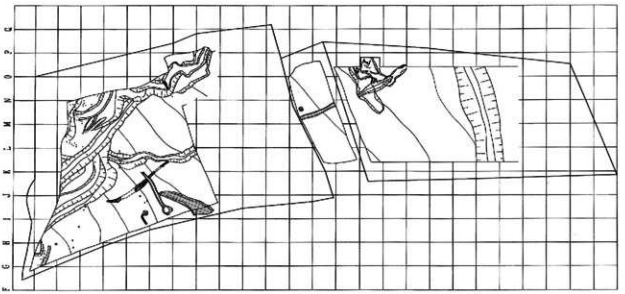


縄文中層の遺構

第15図　遺構面ステージ図ー1

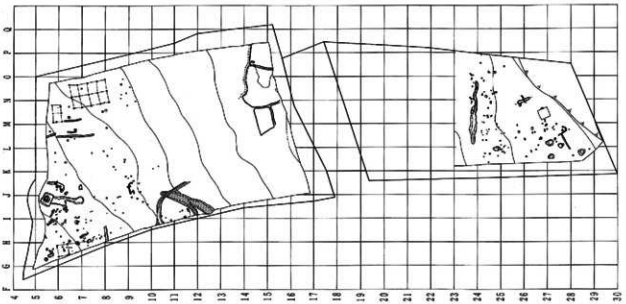


縄文上層の遺構



弥生時代～古代の遺構

0　30m



中世の遺構

第16図　遺構面ステージ図－２

第３節　遺跡の移り変わり（山本）

現地調査において、縄文時代の遺構面を４面確認した。この他、弥生時代～奈良時代の遺構面、中世遺構面の合計６面の遺構面を検出した。

第１面は「縄文最下層文化層」の時期で、縄文時代中期にあたる。出土土器は「個１期」とした船元・里木式および「個２期」の四ツ池・芥川式である。遺構は北区の北半部で土坑を７基を検出した。また現地調査の段階では、中央区の竪穴住居跡（SH501）や、各地区のいくつかの土坑を下層文化層の遺構であると認識していたが、出土遺物の検討の結果、この時期のものであるとしたものもある。縄文の他時期に比べ遺構が少なく、遺構の中心が今回の調査区外に広がっていると考えられる。

写真20　北区（北１区）西壁写真

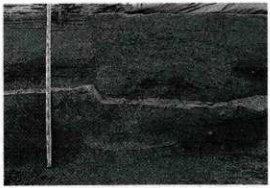


写真21　北区（北１区）西壁土層アップ写真

第２面は「縄文下層文化層」の段階で、北・中央・南区のすべてで遺構を検出した。この時期の土器は「個３期（北白川上層式３期～一乗寺Ｋ式）」、「個４期（一乗寺Ｋ式・元住吉山Ⅰ式）」「個５期（元住吉山Ⅰ・Ⅱ式～宮滝式）」である。北区・中央区および南区の崖上の段丘上では住居跡と考えられる柱穴群や土坑などを検出した。段丘下には「個３期」の丸木舟転用の「木道」と14基の貯蔵穴群を検出した。「個４期」にはこの段丘下は土器・石器・獣骨の廃棄場となった。このように段丘上は居住域として、段丘下は貯蔵穴施設及び廃棄域としての利用が復元されることとなった。

第３面は「縄文中層文化層」で、「個５期」にあたる。北区北半部では、貯蔵穴39基を検出した。この時期の居住域を今回の調査区内では認められなかったので、調査区北西の一段高い段丘上に居住域の遺構が存在していると推定できる。

「縄文上層文化層」の第４面は「個６期」で、北区の集落北限を画する、SD202の南側に遺構が広がっている。この遺構面は２棟の住居跡の他、Ｊ15区付近の墓域、Ｉ12区のサヌカイト集積土坑（SK202）

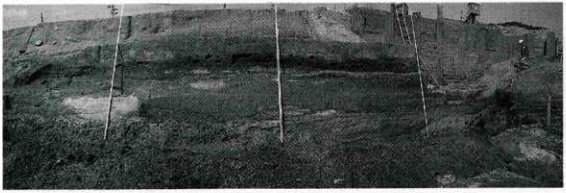


写真22　南区西壁土層写真

などで構成されている。第３面で認められた南区の段丘崖を利用した廃棄域は、多量の土層堆積のため、消滅している。

第５面は弥生時代～奈良時代にかけての遺構面で、溝を中心に検出した。北区の北東部には北西から南東に向かった大きな流路が出現し、それまで縄文時代の遺構群を削るなど、地形を大きく改変している。

第６面は中世の遺構面で、北区では、掘立柱建物跡や井戸・溝などを検出した他、南区でも柱穴・土坑が広がっている。なお、第５面で存在していた北区北東部の流路は埋没し、その上には遺構が広がっている。

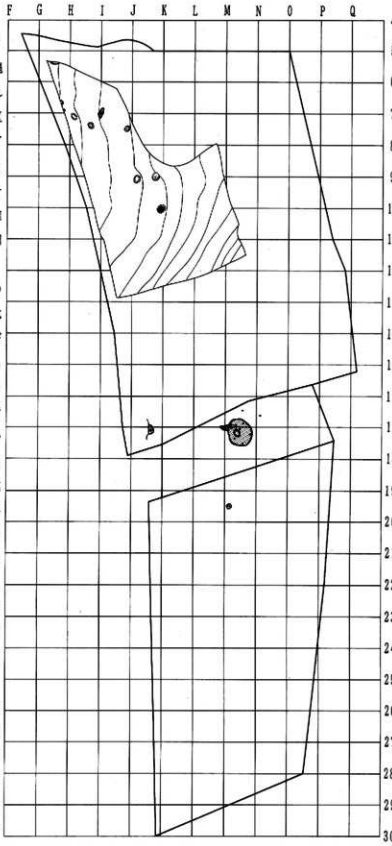
第４章　縄文最下層の遺構・遺物

第１節　遺構（山本）

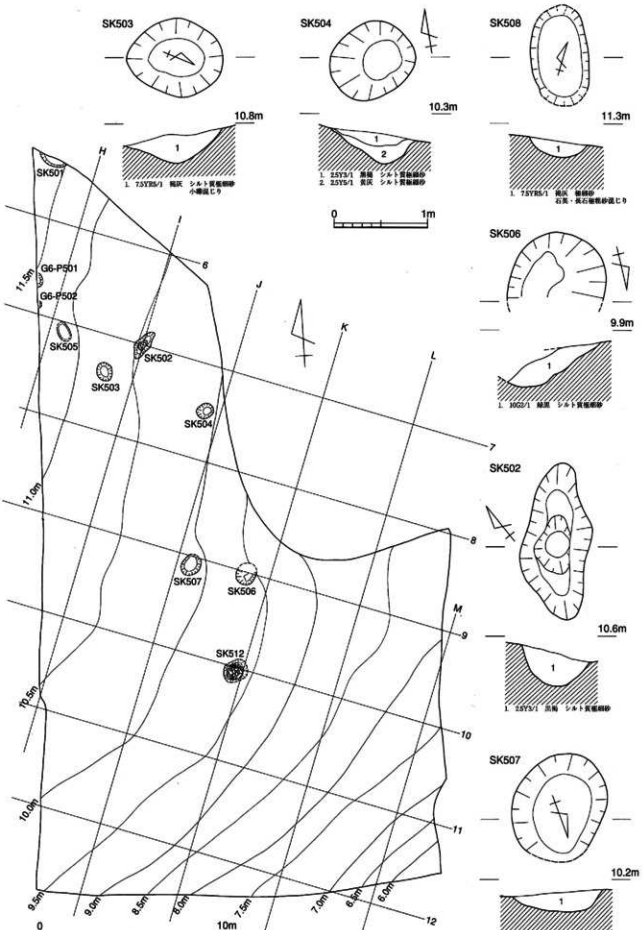
第２次調査まで、この「縄文最下層」の時期は認識されていなかった。しかし、北区北半部の縄文下層の調査終了後、トレンチによる断ち割り調査を行った結果、トレンチ断面に土坑状の遺構が数基確認でき、急遽この遺構面の調査を実施した。

北区北半部分では、現地の調査中に確認できたこの文化層の遺構は、土坑７基および数個の柱穴である（第18図）。土坑をはじめとする遺構からは、時代・時期を明らかにできるような遺物の検出はなかったが、遺物包含層中からは縄文時代中期後葉の里木Ⅱ式土器を検出した。全体の土器出土量が少ないとはいえ、より上位層に顕著な後期中葉以降の土器片を含まないので、それ以前の時期の産物であると考える。縄文最下層に属する遺構はすべて土坑で、詳細は下記の通りである。

北区の南半部、中央区・南区の場合、発掘調査実施中の所見では「下層文化層」の遺構と判断していた遺構のうち、下記のＳＨ501のように埋土内遺物の検討から、最下層文化層として分離すべき遺



第17図　縄文最下層遺構配置図



第18図　北区縄文最下層土坑配置図

第３表　縄文最下層土坑一覧

No.	地区	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	平面形態	深さ／長径(cm)	備考
SK501	北						
SK502	北	170	70	40	隅丸菱形	0.24	
SK503	北	105	85	25	楕円形	0.24	
SK504	北	90	80	25	隅丸方形	0.28	
SK505	北	110	60	15	長楕円形	0.14	
SK506	北	100	70以上	40	円形？	0.4	
SK507	北	120	100	20	楕円形	0.17	
SK508	北	140以上	100以上	30	不正形	0.21以下	下層遺構面で検出
SK509	南	80	70	35	円形	0.44	下層遺構面で検出
SK510	中	120	90	15	楕円形	0.13	下層遺構面で検出
SK511	中	270	90	23	不正形	0.09	下層遺構面で検出
SK512	北	130	110	45	楕円形	0.35	焼礫集積遺構

構の存在が明らかとなった。しかし、最下層に属すべき遺構と下層に属する遺構とを同一面で検出しているので、遺構埋土の遺物の検討で明らかとなったもののみ、最下層の遺構として取り扱っている（第4-1図）。

中央区ではM16・M17区で、竪穴住居跡を１棟（ＳＨ501）検出した（第19図）。現地調査実施中の所見では、これを覆う遺物包含層から判断して、縄文下層の時期に所属すると考えていた。しかし、出土遺物の詳細な検討を加えると、この住居内の埋土に含まれていた土器の多くは船元Ⅳ式または里木Ⅱ式土器であることが判明し、その所属時期を最下層文化層と推定した。

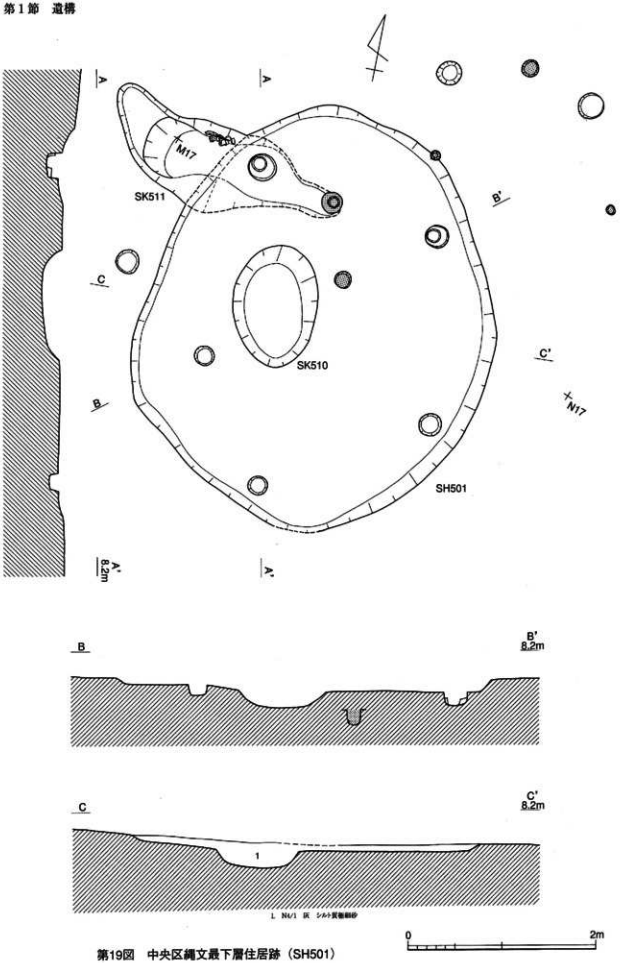
ＳＨ501の形態は南北に長い楕円形で、長径455cm、短径380cm、検出面からの床面までの深さは10～15cm程度である。住居の掘り込みは浅いものの、壁面は30～40度の傾斜を持っている。住居内の埋土は暗灰色シルト質極細砂と単純である。住居床面中央部のやや西寄りに、長径120cm、短径90cm、深さ15cmの中央土坑（ＳＫ510）が存在する。この土坑内埋土からは土器や炭化物は認められなかった。住居床面では、柱穴が７つ認められたが、柱穴内埋土や平面的な位置関係から判断すると、この住居に伴うものはＳＰ１～５の５つであろう。

この住居北西部には土坑状の掘り込み（ＳＫ511）を検出した。長さ270cm、幅90cm、深さ23cmである。この土坑と住居との切り合い関係は不明で、住居にともなう施設なのか、そうでないのか、判断はつかない。ただ、この土坑からも縄文時代中期の土器（船元Ⅳ式、里木Ⅱ式）が出土しており、いずれの遺構も縄文最下層文化層に属することは間違いない。

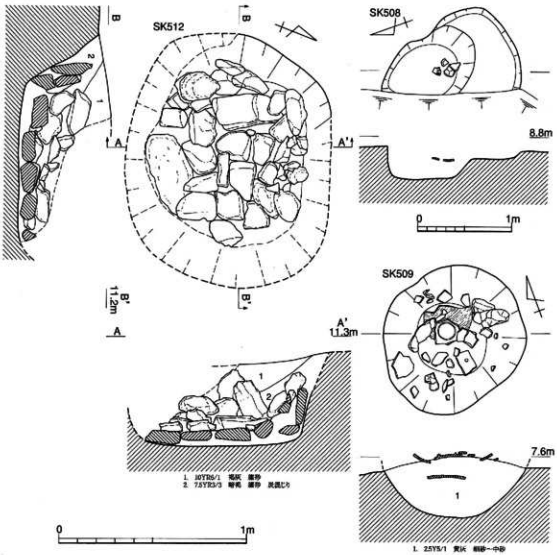
兵庫県内では、縄文時代中期後葉の住居跡として、加美町熊野部遺跡、神戸市篠原Ａ遺跡などがあるが、いずれも平面形態が楕円形を呈する点が共通しているようである。

北区では、ＳＫ508を出土遺物によって、最下層文化層の遺構であると判断した。長径140cm以上、短径100cm以上の不正形で、深さは20cmである。縄文中期の船元Ⅳ式の深鉢形土器が底部を中心に１個体分出土している。

ＳＫ512は、復元による推定では、長径130cm、短径110cmの楕円形もしくは隅丸方形の平面形で、検出面からの深さは45cmである。この土坑基底面および内壁面には長径約20cm程度の平石（石材は花



第19図　中央区縄文最下層住居跡（SH501）



第20図　縄文最下層各地区土坑

崗岩など）が密に敷き詰められた状態で検出した。特に底面の石は風化が激しく、加熱・受熱によってもろくなったものと考えられる。神戸市篠原Ａ遺跡では、縄文中期に属する「焼礫集積土坑」が確認されている。このような例からこの土坑は、いわゆる「焼礫集積土坑」で、調理施設的な機能を有していたと思われる。

南区では、その後の縄文下層文化層の包含層が堆積する崖面より2.5m北側に位置するM19－３区のＳＫ509が検出され、その埋土から、縄文時代後期前葉に相当する土器の出土を見た。土壙の規模は直径75cmの円形を呈し、深さ25cmを測る。

以上のように、遺構の出土土器型式から判断したものも含め、縄文最下層文化層に属する遺構として、12基の土坑を確認した。時期決定の材料に乏しいが、概ね縄文時代後期中葉以前で、縄文時代中期後葉もしくは後期前葉の２つの時期のいずれかに帰属させる事が可能であろう。ＳＫ512を除いて、いずれも形態的特徴がなく、長径に対する深さの値は、0.20前後と小さい。より上位の文化層で検出できたような、断面がフラスコ状のものも認められず、なだらかなU字あるいはV字に近いことから、ドングリなどの貯蔵穴としての機能は、持ち合わせていないようである。

第2節　土器

(山本)

1．早期後葉～中期の土器

各遺物包含層から、遺構などに伴わない土器が認められたが、その中でも縄文早期後葉から前期初頭にかけてに属すると思われるものが僅かに出土した（1～3）。

特に1は、外面に無節縄文がみとめられ、凸帯部分には半截竹管の刺突が観察される。また、断面観察から植物繊維が確認され、「繊維土器」と認識できる。2は外面の口縁部付近に、上下からの指頭圧痕による横方向の凸帯を作り出している。口唇部には刻みが施される。また、外面の凸帯の下部及び内面は横方向のナデである。3は前期初頭のものと考えられ、口縁部外面には、粘土紐を一条貼り付けることによって肥厚させ、内面にナデつけ、その上端部に軽い刻みを施す。また、口縁部の下には半截竹管による横方向の刺突が施されている。内面はナデ調整であろうか。

また前期から中期にかけての大歳山式～鷹島式と考えられるもの（4～7）も出土している。

中期前半の土器として、分類できた土器は数多く認められた。船元Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式・Ⅳ式、里木Ⅱ式である。

船元Ⅰ式としては、8～14・16・17の土器片である。表面を縄文および爪形文で構成しているものの他、11～14の表面には、二枚貝の背面部分を押し当てた、貝殻圧痕が観察できる。器形を完全に復元できるものはないが、多くはキャリパー形の深鉢であると考えられる。

8・9・10は口縁部表面にC字状の爪形文を施し、口唇部にも同様にC字状の爪形文を施している。11・13は、口縁部表面の貝殻圧痕列の下にⅠ字文（または逆C字状爪形文）を施し、部分的に円文列弧線を施すことが伺える。17は、小片ではあるが、波状口縁であることが推測できる。18の口縁部（口唇部）にもC字状爪形文が施されている。

船元Ⅰ式またはⅡ式と考えられるものが15・18～21、船元Ⅱ式と認識したものは22～30である。

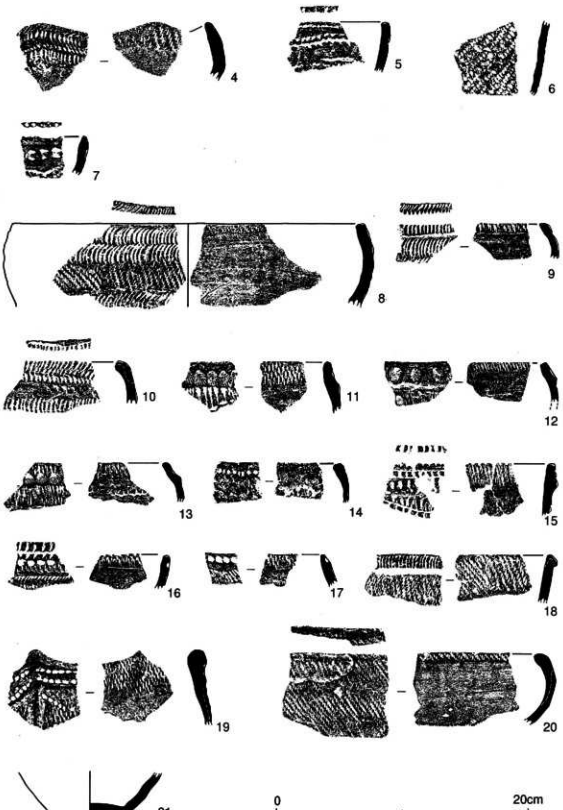
19は深鉢形土器の口縁部である。口縁部の表面が一部剥離しているが剥離面にも縄文が認められる。23は表面口縁下に弧状の押し引き刺突列が認められる。24は口縁波頂部の破片と考えられる。表面は縦方向の直線文施文の後、竹管または沈線による円形の文様が施されたものである。また、表面右側の側面には、二枚貝の貝殻圧痕が観察できる。25・26・27では、表面に円形の文様が観察できる。26では縄文の地文に縦方向の直線文を施し、その後沈線または竹管による円形文を加えている。30は内面上端にも縄文が施され、口縁部付近の破片であると考えられる。

船元Ⅲ式は31～35である。31は口径44.9cmと推定復元できる波状口縁の深鉢（口縁部）である。表面は縦方向の縄文地文の上に、粘土紐を貼り付け、さらにその上に半截竹管による弧状文または直線文を施している。波状口縁及び文様単位は10～12単位程度と推定復元できる。内面は二枚貝のナデであろう。

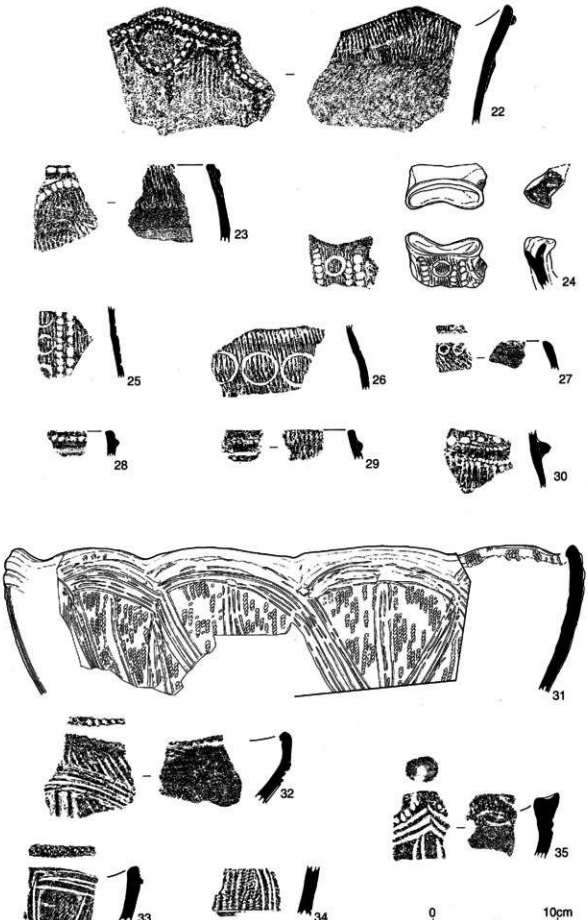
船元Ⅳ式と分類したものは36～65である。口縁部形態が内湾するもの（36～54：いわゆるキャリパー状のもの）と口縁が直立または外反するもの（55～63）に大きく分類することができる。口縁の内湾するもののうち、外側に肥厚するものは45で、内側に肥厚するものは36・43・46～50である。

36は口径33.8cmと復元できた深鉢形土器である。縄巻縄文地文上に口縁部には半截竹管による4条の平行沈線を、その下には4条の沈線による連弧文を施す。口唇部には刻みを施す。37も深鉢形土器の上半部で、口径29.8cmに復元できる。縄文地文の上に研磨を施し、竹管による弧状文が施されている。

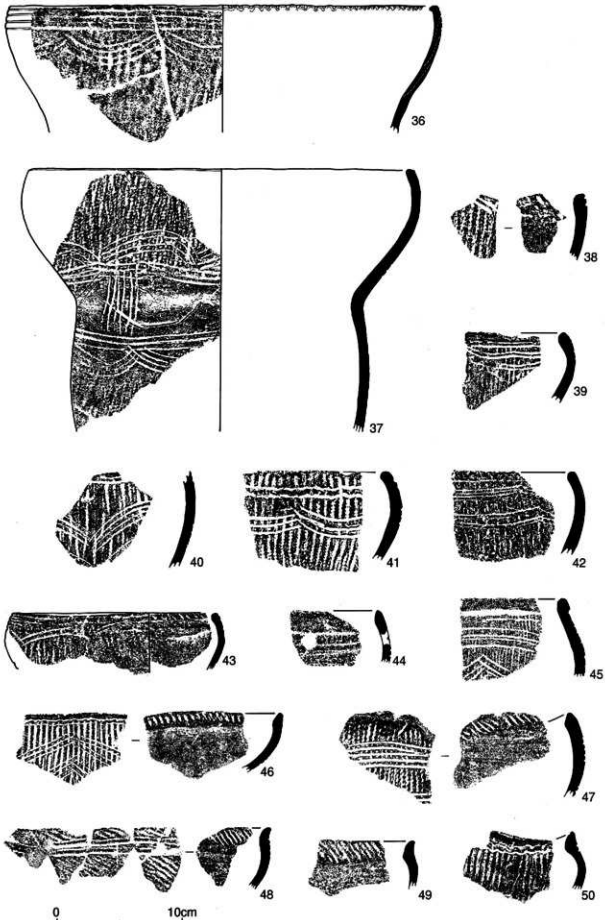
第21図　縄文最下層出土早期後葉～前期初頭土器



第22図　縄文最下層出土前期末～中期前葉土器



第23図　縄文最下層出土中期土器-1



第24図　縄文最下層出土中期土器-2

胴部中央のくびれ付近は横方向のナデののち、竹管による縦方向の沈線が施される。口唇部は面取り後、研磨がおこなわれている。40・41は縄巻縄文上に口縁部下には横方向の平行沈線と、胴部には竹管による複数弧状文が施されている。

45は撚糸文の地文に竹管による複数沈線が認められる。

51も深鉢形土器の口縁部から胴部の破片である。口径38.0cmと推定できる。口縁部外面は縦方向の縄巻縄文であるが、胴部のくびれ部分には半截竹管による横方向の条線文を施す。この横走条線文の上部には横方向の１条の波状文、下部には半截竹管による２条の波状文も施されている。

55は口縁が外反し、最大径が胴部である深鉢形土器である。口径33.9cmと推定され、外面は縦方向の縄文を施すが、条は交互に深浅にあらわされている。口縁内面の上端部には縄文が施され、その下はナデによる調整である。

船元Ⅳ式または里木Ⅱ式土器と考えられる土器が66～73である。

67はキャリパー形の深鉢形土器で、口径25.4cmと考えられる。表面は縦方向の縄巻縄文が施され、口縁部のくびれ部分には半截竹管による２条の波状文が認められる。内面はナデで仕上げられている。

72・73は、表面に撚糸文が用いられ、里木Ⅱ式土器と考えられる。

縄文中期末葉のものと考えられる土器片（74・75）も確認できる。

74は、「双耳壺」の耳部分と考えられ、時計廻りの渦巻き状突起部である。棒状工具による穿孔が認められる。

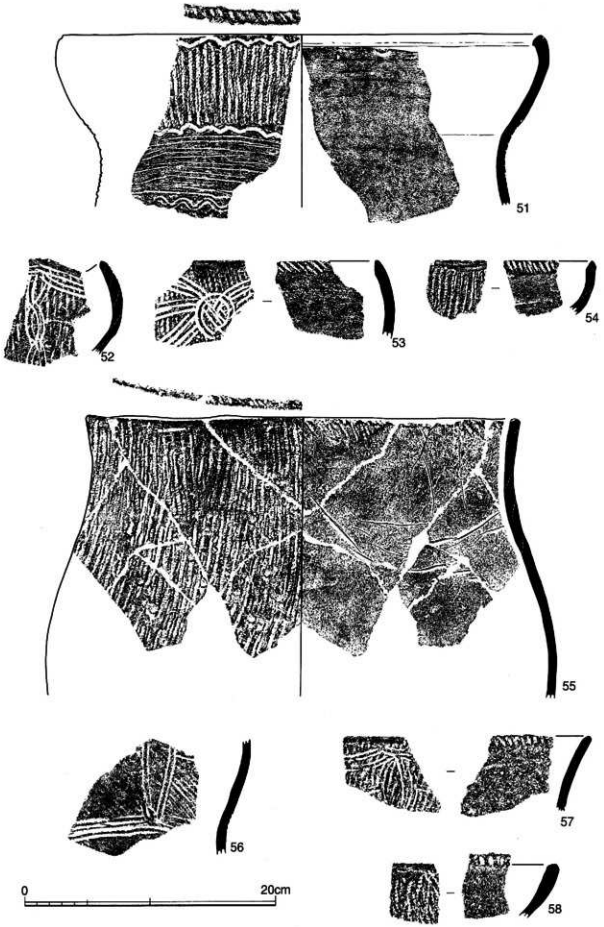
75は、大ぶりな突起を持つ深鉢形土器で、北白川Ｃ式の深鉢Ｃ類に比定されよう。

中期土器と考えられるが、小片のため詳細不明なもの（76～90）も図化した。西日本各地からの搬入であると考えられるものは76～80、東海・北陸からのものは81～90である。

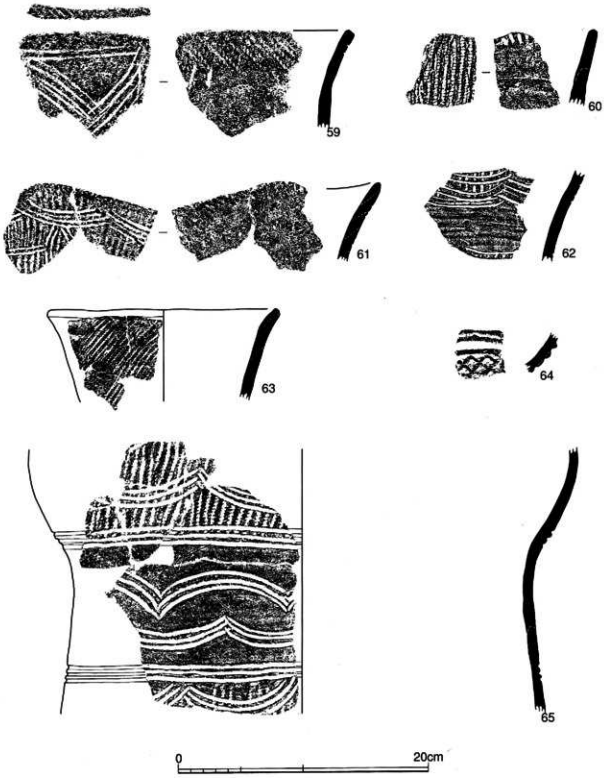
76は波状口縁部で、表面に縦方向の貼付突帯後にナデ、横方向の櫛描文を施している。波状口縁頂部には指押さえがあり、口唇部には横方向の刺突沈線が３条程度認められる。78の表面も横方向の刺突が施されているが、内面の調整は磨滅のため不明である。なお、76と78は同一個体である。77は沈線文と縦方向の刺突文が施されている。内面調整の詳細は不明である。79は口縁部破片で表面は沈線文が施されている。80は、中央区住居跡（ＳＨ501）出土で、口縁部の破片で表面には縦方向の刻みが２列認められる。77・79・80はかつて里木貝塚で船元Ⅲ式Ｅ類とされたもので、いわゆる福田Ｃ式土器と呼ばれているものである。

81から90は、東海・北陸地方の影響下にある土器と考えられる。81は口径32.0cmと考えられる鉢形土器の口縁部で、表面には隆帯の上部に半截竹管による刺突が連続して波状におこなわれている。隆帯の波頂部は14箇所と推定される。内面は指押さえ調整の後ナデによって仕上げている。北屋敷式であろう。82は口縁部破片で、口唇部は面取りが行われている。表面は横方向の凹線が３条施され、その下には縦方向の刻みが認められる。

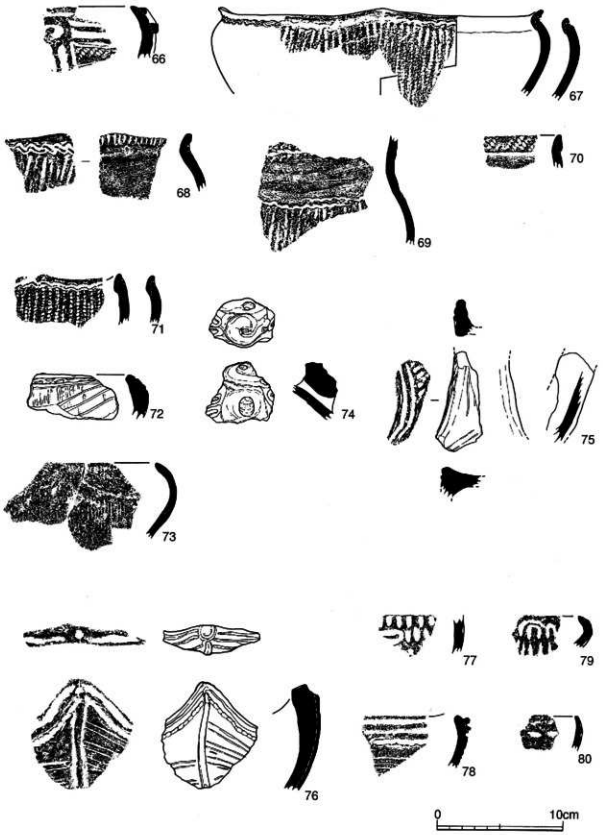
84・85は胴部破片で、横方向の沈線が５条施されている。１列の沈線間には縦方向の刻みが認められ、東海地方の山田平式土器と考えられる。87は口縁部破片で、表面突帯上には縦方向の刻みが１列施され、その下には３条以上の沈線が横方向に確認できる。88も口縁部破片で、口唇部は面取り後ナデが施されている。表面には横方向の凹線が２条施され、その後に斜め方向の刻みが行われている。89・90は同一個体と考えられ、表面には豆粒状の粘土塊を数多く貼付け、その後縄文を施しているようである。90には縦方向の沈線が３条確認できる。



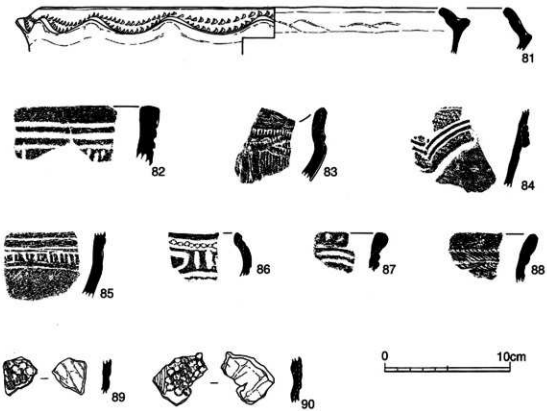
第25図　縄文最下層出土中期土器-3



第26図　縄文最下層出土中期土器-4



第27図　縄文最下層出土中期土器-5



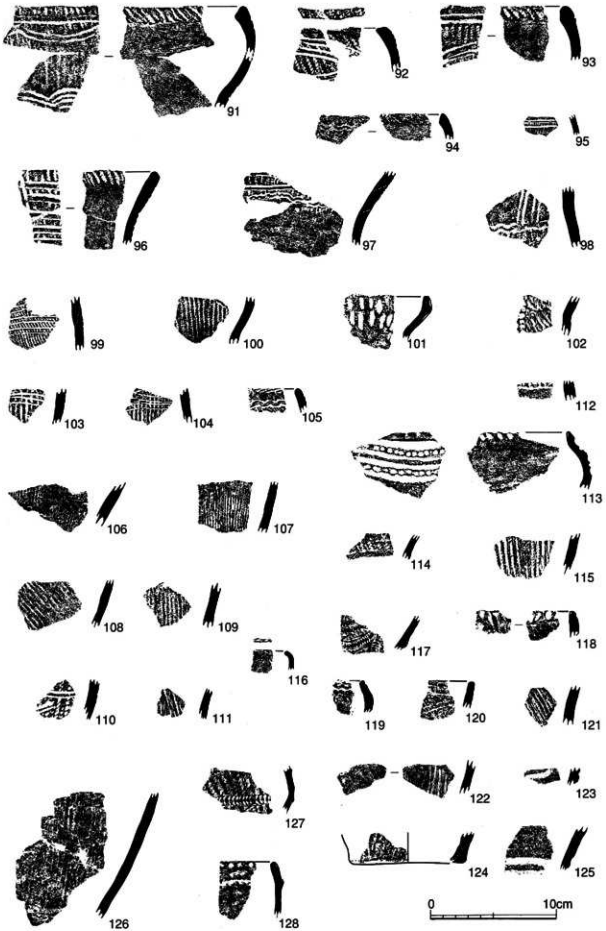
第28図　縄文最下層出土中期土器-6

中期土器の内、明らかに同時期の遺構から出土した土器片も数多く存在する。

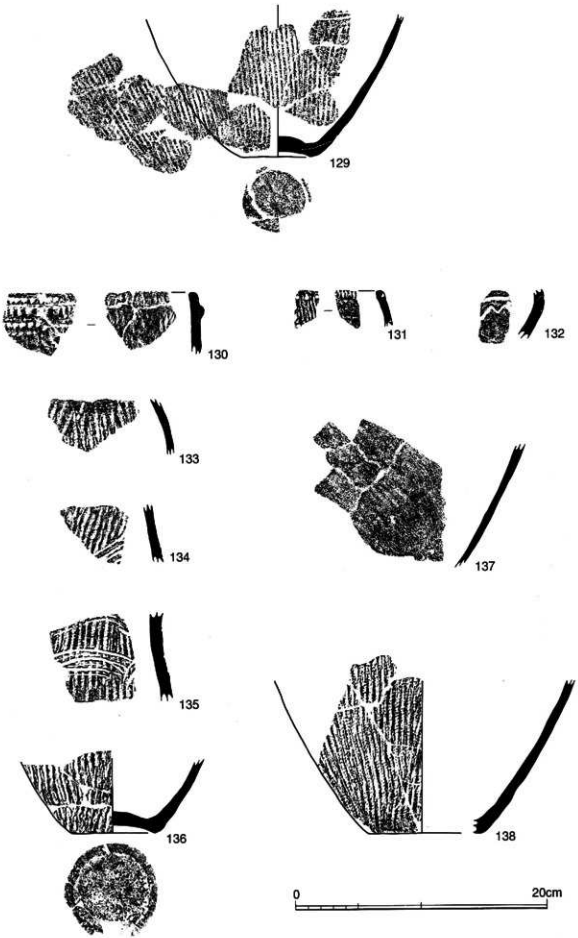
中央区の住居跡から出土したのは91～128である。住居跡北西区の埋土からは91～112、北東区からは113～115、南西区からは126～128、中央土坑からは116、住居跡の床面から一括で検出できたものは117～125である。

91は表面に縦方向の縄文地文上に、口縁部に2条の平行竹管文を、その下には2条の波状文を施すものである。口縁部内面の口唇部にも縄文が施されている。92・93も同様の特徴を有する。96は表面の縄文地文に竹管による平行沈線が10条確認できる。口縁部内側にも縄文が施されている。97の破片上半部には縄文地文に竹管による平行沈線2条と振幅の小さな波状文が施されている。下半部は無文である。以上のような特徴を示すものは、91～98などで、船元Ⅳ式土器であろう。99は撚糸地文上に竹管平行線が描かれている。106の破片も表面に撚糸文が施されている。これらの特徴を示すものは里木Ⅱ式と考えられ、99～107がこれにあたる。住居跡北東区から出土した113は、表面に平行凹線が4条施され、凹線間には2列の刺突が認められる。口唇部のも斜め方向の刻みが存在する。小破片のため詳細は不明であるが、里木Ⅱ式を想定したい。101は口縁部の小片であるが表面に2列の刻みが施されている。なお内面調整は不明である。形態的特徴から船元ⅢE式であろうか。住居跡南西区から出土した127は縄文地文上に貼付凸帯を施し、その凸帯上にハ字上の刻みを連続して行っている。117も同様の特徴を持ち、前期末の大歳山式の特徴を有する。

北区M16区の土坑（SK511）から出土した129は、縦方向の縄文（撚糸文？）が交互に深浅に押捺された、あげ底の底部で、船元Ⅳ式である。



第29図　縄文最下層出土中期土器-7



第30図　縄文最下層出土中期土器-8

北区Ｊ16区の土坑（ＳＫ508）からも土器片（130～138）がまとまって出土した。表面に縄巻縄文が施されているものは、133・134～136・138である。130は、表裏とも粗い縄文で地文が施され、表面については貼付凸帯後そのうえに刻みが施され、凸帯の上下には平行した刺突列が認められる。131も表裏とも粗い縄文地文で、表面には平行の刺突列が２条、口唇部には刻み列が存在している。130・131とも船元Ⅱ式であろう。134・135は船元Ⅳ式の胴部破片であると考えられる。135は表面縄巻縄文地に竹管による４条の波状文が施されている。なお、137には巻貝条痕が認められ、縄文後期土器が混入した可能性が高い。ほかはいずれも船元Ⅳ式土器の口縁部片・底部片などである。

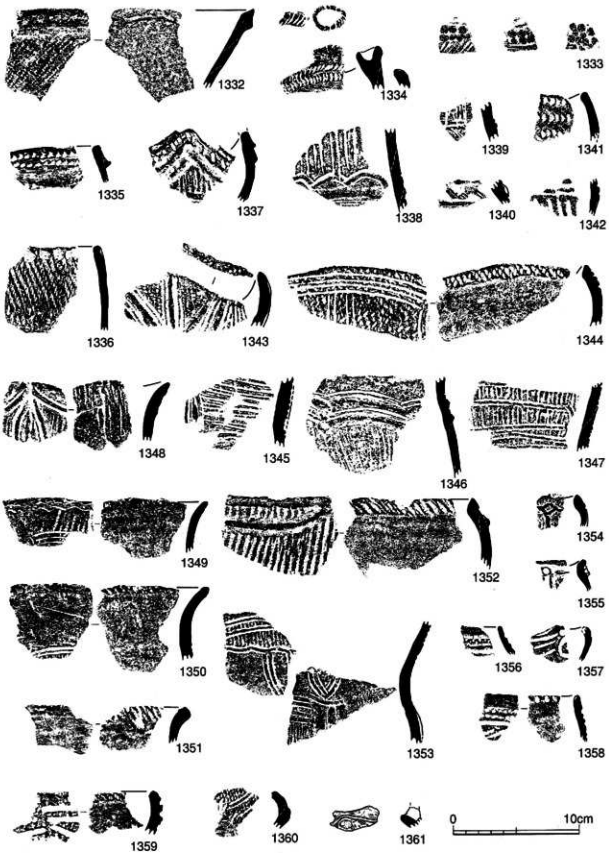
２．各層各地区出土縄文中期土器～補遺

（岡田）

1332は南区縄文下層SD451出土。口縁が大きく開く器形であり、深鉢あるいは浅鉢の判定は難しい。直前段、前々段ともに２本撚のＬＲを外面に施文後、口縁部上端から外面にかけて隆帯を貼付、内外ともになでつけている。対応する内面は若干凹み気味の斜面をなす。胎土中には花崗岩起源と思われる粒径４mm前後もある石英が多量に混和されており、特徴的である。胎土の特徴等からして前期初頭のものの可能性がある。1333は89、90と同一個体と思われる破片であるが接合しない。1334はＬ19区８層出土の深鉢波頂部。突起は小ぶりながらも酒盃状のもので、その頂部にも刻みが施されている。鷹島式ないし船元Ⅰ式に比定される。Ｋ20区出土1335はキャリパー形深鉢の口縁部で、口縁直下に貼り付け凸帯が巡る。凸帯の上には２条の刺突列が配されるが、個々の形状は半月形を呈しており、通常の円形刺突と異なって、むしろ81のような東海地方の土器との関連を窺わせる。ただし、凸帯より下位には粗い撚りの縄文施文が認められ、そこに刺突列をもって弧線文が描かれることから船元Ⅱ式に比定されよう。Ｋ20区８層出土の1336もキャリパー形深鉢であるが、口縁部の内彎は緩く長い。粗い撚りのＲＬで、直前段３本撚である。口縁部には小二枚貝の背面圧痕を並置する。1337はM20区８層出土。波状口縁をなすキャリパー形深鉢で、頂部には突起の存在を窺わせる剥離が認められる。口縁に添っては縄文地に２条の凸帯を貼付、上位のものと口縁の間には棒状工具による刺突が施される。それよりやや下がった位置にも水平に巡る凸帯があるが、摩滅のため不明瞭である。船元Ⅱないし Ⅲ式に比定されよう。

1338から1342は異系統土器である。1338は水平の隆帯直上に半截竹管で弧線文を描いた上、それに直交するように平行線を充填させたもので東海地方でいう山田平式に比定されよう。特に胎土は緻密で混和材が少なく、搬入品と考えられるものである。同様に1339も山田平式となろうが、描線が雑描で模倣品の可能性が指摘できよう。1340は平行隆帯間に三角形の印刻を交互に施して蛇行状隆帯を表出したもので、その頂部にＲＬ縄文を施文する。やはり山田平式に比定されようが前二者より古相と考えられるようである。1341はキャリパー形を呈す口縁部に「Ｄ」字状の刺突列を３条にわたって施す。摩滅顕著。東海地方・北屋敷式に比定されるものか。1342は器形不明であるが、棒状工具にて沈線施文される薄手の体部破片。間壁忠彦氏のいう船元Ⅲ式Ｅ類にあたる可能性もある。

1343、1344はＲＬ縄文を地文として半截竹管にて施文するキャリパー形の深鉢口縁部。前者は波状を呈し、波頂部より垂下する隆帯両脇に半截竹管文を添わせる。なお、口唇部にも縄文を施文するが内面には至らない。後者の縄文は直前段３本撚。内面向きの口唇部にも縄文が施される。口縁に添った半截竹管文のほか、直交する文様が配されるが、その一部である弧線文は明らかに口縁平行線より先描である。船元Ⅲ式に比定されよう。1345および1347の器面は縄文でなく半截竹管文によって充填されている。前者は1343同様に隆帯貼付により文様を構成し、その間に半截竹管文が充填されている。船元Ⅲ式に比



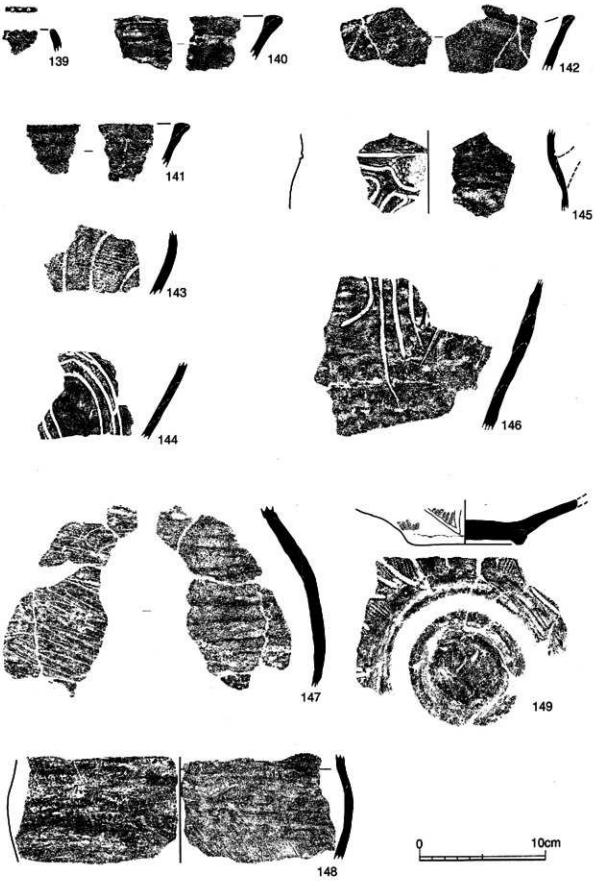
第31図　縄文最下層出土中期土器-9

定されよう。後者は縦位多重に施文後、横位への施文。船元Ⅳ式にあたろうか。1346は深鉢胴部。無文の頸部は隆帯および半截竹管文で表された下弦長弧線で画され、以下にはＬｒによる縄巻縄文がみられる。船元Ⅲないし Ⅳ式に比定されようか。1353も同様の形態をとる胴部であり、頸部の無文帯を跨ぐようにして、口縁部と胴部を部分的な弧線文で連繋するが、その直下には３本一組縦位隆帯が貼付されている。口縁部に向う文様は1347の構成に通じる部分もあるが、明瞭な蛇行線によって頸部とが画されている。地文はＬｒ縄巻縄文であるが、船元Ⅳ式に比定されよう。キャリパー形深鉢口縁部の1352も地文は縄巻縄文、内向する口唇部にも縄文施文され、1344に形態上通じるものがある。また、外面には無文の隆帯が縄文地に貼付される。船元Ⅲ式に比定されよう。

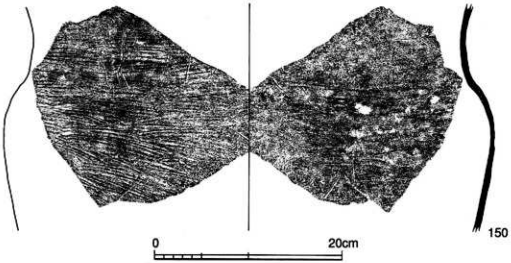
1348から1351は、従来さほど注意が向けられなかった口縁部が外反して開く器形の深鉢である。いずれもＬｒの縄巻縄文を地文とするようでもあり、船元Ⅲ・Ⅳ式に比定されようか。ただし、1348のみ波状口縁で、59、61同様に口縁直下外面にも半截竹管による施文がみられ古相を呈す。1349は蛇行文を口縁に添わすが、それ以下の弧線文とは間隔がある。内向する口唇部のみ縄文施文。1350も内向口唇部に縄文を施文するが、口縁部外面は無文となる。1351も同様にして外面無文。くびれた頸部以下に文様が配されるものであろう。

1354から1358は里木Ⅱ・Ⅲ式に比定される。いずれもキャリパー形の口縁部であるが、1354、1355および1357は波状口縁の波頂部となろう。1354は撚糸文を地文とするようであるが、ほかの個体には見当たらない。ソーメン状の粘土紐を貼付することによって施文する1354、1355に対し、1357は沈線のみで施文、1356、1358も沈線文のみしか確認できないが、前者は平行沈線間を上下交互刺突し、後者は平行刺突列を構成する。1358のみ内向する口唇部に疎らな刻みを施している。

1359は摩滅顕著にて不明瞭ながらも、ＲＬ縄文地に半截竹管状工具によって深い沈線文を施している。内向する口唇部に縄文施文がみられることから船元Ⅲ式に比定されようか。1360は器種不明である。整った節をもつ縄文地に半截竹管文を施している。1361も同様の施文。強く内彎する口縁部をもつ小型の器形で、上方に向って棒状の突起が伸びていたようであるが欠損。同定が難しい。



第32図　縄文最下層遺構出土後期土器（SK509）-1



第33図　縄文最下層遺構出土後期土器（SK509）-2

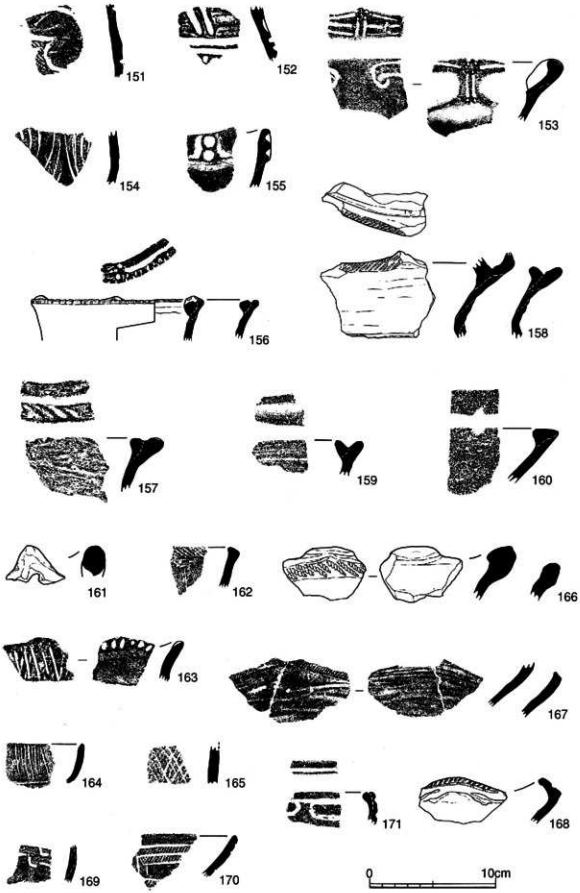
３．後期前葉の土器（第32～35図）　（岡田）

遺構出土の土器（第32・33図139～150）；包含する遺物内容から確実に後期前葉に比定されるのはＳＫ509のみである。139から142は無文の口縁部。139は内彎するもので、まるく収まる口唇部に軽い刻みが配される。140以下の３片は外傾する口縁部で、その上端は内面に粘土紐を一帯加えることによって肥厚させる。内外面ともｊ寧なナデ調整。142のみ口縁波状を呈すようである。143は曲線状の幅広い縄文帯をもつ深鉢胴部。摩滅顕著であるが縄文の原体はＬＲのようである。144も深鉢胴部ながら沈線間は広くない。３本一組の平行沈線によって垂下する弧線を対弦に描いており、その部分に比較的雑にＲＬ縄文を充填施文する。145は頸胴部。胴部上半には剥離痕がみられ、そこを中心に文様が展開していることからして、頸部に渡す把手が取り付いていたものと推定される。把手より左下方に斜行する沈線の上端は、一部欠損しているが鍵手状に巻き込むようである。縄文施文については不明瞭。146は胴部下半。３本一組と思われる平行沈線が弧を描いて垂下する。縄文はみられない。147、148および150はいずれも無文の深鉢胴部である。前二者は器面横走向のナデ調整が施されるが、特にその外面において混和された砂粒の移動飛跡が顕著にみられる。150は腹部いかり、頸部が強くくびれる形態をとり、外面には巻貝によるものと思われる条痕が顕著に残る点で前者とは相違する。内面は横走向のナデで三者共通している。149は深鉢底部。底面外縁は突出し高台状を呈す。外面においては底部近くまで施文がみられ、胴部より垂下してきた不規則な３本一組の弧を描く平行沈線文にＲＬ縄文が充填されている。

以上が本土坑出土土器の主だったもので、このほかに若干の中期土器破片および無文体部片がみられる。139、143は保留されるが、それ以外は四ツ池式（広瀬土壙40段階）に比定されよう。ただし、内面の小さく肥厚した口縁部の存在からすると、近年提唱のあった芥川式に相当する可能性もある。

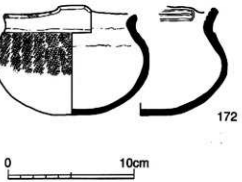
上位包含層出土の土器（第34・35図）；各区各層から抽出してきたが、北・中央区縄文上層および中層からの出土が比較的多く、近接する南区下層などには稀少である。器面の摩滅も認められることより、その多くは流水等によって運ばれてきたものであろう。近隣に該期を主体とする遺跡の存在が推察される。

151は深鉢胴部破片。幅0.8cm前後の間をとる平行沈線で「Ｊ」字状文を描き、横に繁ぐ。ＲＬ縄文施文。福田ＫⅡ式古段階に比定される。153は口縁の広がる浅鉢形土器。口唇部は外面から巻き込むよ



第34図　縄文最下層相当の後期土器-1

うに整形され、内面に向って肥厚する。内面においてはそこより肥厚部分が下降し、その先端は口縁部を少し下って巡る凸帯に連繋する。口唇部には３本の平行沈線による施文、下降部分には両端刺突の平行沈線が配され、それが口唇部にも重複されることによって、そこの連続性は寸断される。外面においては、口唇部に対応して間隙が置かれ、それを間に対向して鍵手状に巻き込む平行沈線文が配される。内面凸帯の存在より判断すれば、福田ＫⅡ式の範疇に収まろうか。152は胴部破片で、深い２本の平行沈線により施文される。沈線間は狭く縄文はみられない。154も深鉢胴部、３本以上の平行沈線を弧状に垂下させ、そこにＬＲ縄文を充填する。四ツ池式前後の所産と考えられよう。155は内彎する口縁部で、波状を呈す。外面には凸帯が配され、口唇部との間に「８」字状を呈するような、刺突を伴う肥厚部が設けられている。外面のミガキは顕著である。156は広がる口縁の上端内面に粘土紐を加えて肥厚させ、上向して幅広い口唇部に１本の沈線、「８」字状貼付文を配したもの。沈線外側には刻みが施されるほか、それと口縁部外面のなす角の上もまた刻まれる。157も同様に上向する面に太目の沈線を配すが、その外側には大ぶりな斜位の刻みが施される。結晶片岩を胎土中に多混する。158は刻みの代わりにＬＲ縄文。なお、誇大な突起が二股の上向面を跨いで取り付いていたようである。施文のない159例もあるが、これらは総じて四ツ池式に比定されよう。160は雲母を多く含む異質な胎土をもち、口縁部を内面に向って断面三角形に肥厚させる浅鉢形上器か。161は四ツ池式ないしは芥川式の口縁部突起である。内面のち外面から穿孔されている。162から165は条線を施文に用いる土器で、概ね北白川上層式２期に比定されようか。南区下層の635や687などもこれに相当しよう。肥厚させた口唇部にはＲＬ縄文が施されている。166から168は深鉢形土器の外反する波状口縁部で、166は口縁外面を肥厚させ、そこにＲＬ縄文施文。波頂部には楕円球状の突起を付し、その頂部を平坦にした上で、平行沈線によって弧状文を描いているようである。167は口縁外面上端にＬＲ縄文。波頂部は突起があったものか欠損している。168は急角度に折り返したような口縁部で、波頂部下の屈曲部には頸部よりナデを施し、凹みを設ける。口縁外面には沈線施文、以上ＬＲ縄文。上位の沈線内には刺突が施されている。169は胴部破片。鍵の手状沈線文がみられ、擬縄文が施される。170は皿形の浅鉢。外面には３本一組とした平行沈線文で幾何学状の意匠が描かれ、その内にＬＲ縄文を充填している。171は内彎する口縁部であるが上端は内折、外面屈折部は平行沈線で挟まれ、その間にＲＬ縄文施文する。以上以下ともに丁寧な調整。外面には枠状の沈線文が描かれている。南区上層、弥生時代の溝ＳＤ107よりほぼ完形に近い状態で出土した172は球状の鉢形土器。まるく張った胴部に短く外反する口頸部が取り付く北白川上層式の主要器形である。口縁部上端外面には胴部より少ないものの縄文施文をみるほか、一ヶ所のみ方形板状の突起が付され、その内面に沈線文が描かれる。かような類例は少ない。胴部の縄文はＲＬを縦位に回転施文したものである。



第35図　縄文最下層相当の後期土器-2

第3節　石器

(山本)

この文化層からの出土石器は、僅かであり、5点の石鏃を図化した。磨製石器の出土は確認できなかった。A類3点、B類1点、C類1点である。分類基準等については、第4章第2節の「下層の石器」に詳しく示してある。

第4表
北区・中央区縄文最下層石器組成表

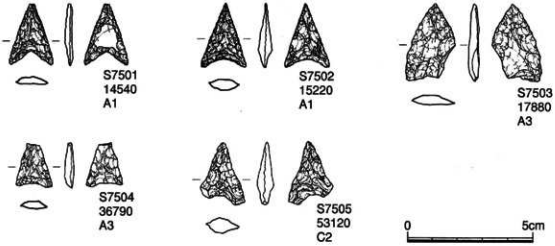
打製	点数	%	磨製	点数	%
AH	5	71.4	AX	0	
DR	0		SS	0	
SC'	0		HS	0	
SC	0		SD	0	
RF	0		SH	0	
UF	0		SP	0	
PS	1	14.3	SW	0	
CR	1	14.3	その他	0	
DM	0				
小計	175	−	小計	0	−

第5表
北区・中央区縄文最下層楔形石器分類表

	点数	%		点数	%
A1			B1		
A2			B2P		
A3			B2L		
A4	1	100	B2V		
			B3		
			B4		
			B?		
A計	1	100	B計		

第6表　北区・中央区縄文最下層石鏃類型分類表

	点数	%		点数	%		点数	%		点数	%		点数	%
A1	2	40.0	B1			C1			D1			E1		
A2			B2			C2	1	20.0	D2			E2		
A3	1	40.0	B3	1	20.0	C3			D3			E3		
A4			B4			C4			D4			E4		
A5			B5			C5			D5			E5		
A計	3	60.0	B計	1	20.0	C計	1	20.0	D計			E計		



第36図　縄文最下層出土石鏃

第５章　縄文下層南区の遺構・遺物

第１節　遺構

(山本)

南区下層は扇状地末端部分の微高地と河川の水流による影響と考えられる崖面が形成され、崖下は低湿地になる。南区の北方は扇状地末端に位置し、最終遺構面で縄文最下層と縄文下層の遺構が混在する状況がみとめられた。一方、崖面以南の低地には個３期～個５期の遺物を多量に含む土層が厚く堆積していた。

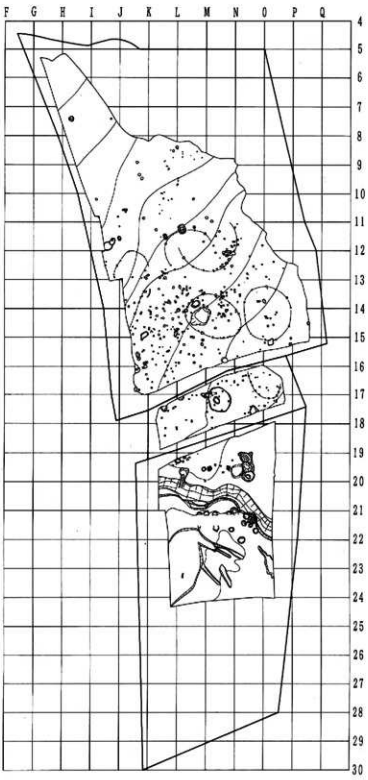
１．　下層文化層３期

ａ．黒色地山層（３期－１）

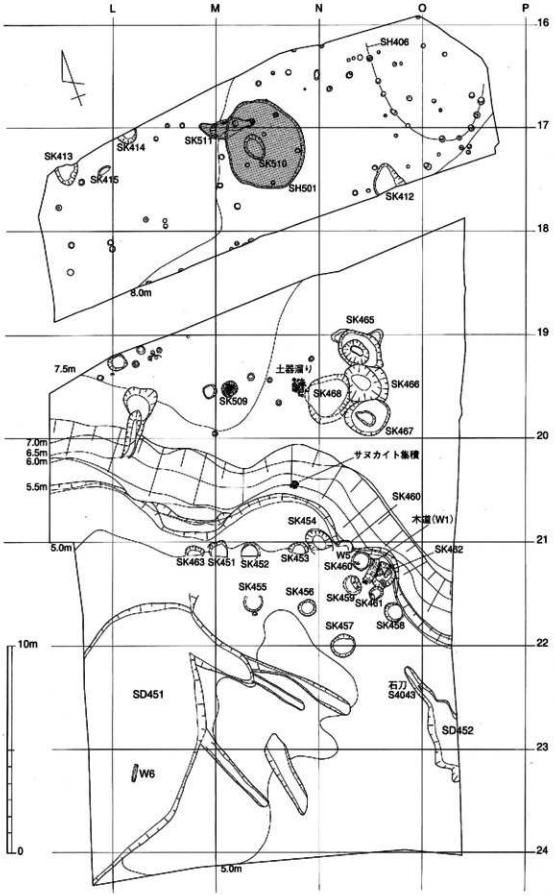
明らかな遺構として、丸木舟転用の「木道」１基と貯蔵穴14基を検出した。これらの遺構群は比高差約２ｍの崖面直下の傾斜変換点付近の平坦面で検出した（第38図）。

丸木舟を転用したと考えられる木道は、N21区で検出し、最大長146cm、最大幅42cm、厚さ3cmで、「船底」を上にむけて、貯蔵穴ＳＫ462の一部を覆っていた（第41図）。材質はクスノキである。木道北側の下部には横木（長さ59cm、直径3cm）が認められ、それに対応するように、木道側には直径3cm程度の穿孔が存在している。紐等は検出されなかったが、この穴によって、横木と木道は固定されていたと考えたい。

木道東側にも縦木（長さ84cm、



第37図　縄文下層遺構配置図



第38図　中央区・南区縄文下層遺構配置図

直径７cm）が存在し横木と何らかの方法で結ばれていたと考えられる。なお、この縦木は直立しているとはいいがたく、南からの圧力（土圧）で北側に倒れ込んだ形態を示している。南端には３個の拳大礫がおかれていた。以上の施設は、木道の沈み込み防止施設と考えられる。「木道」の東側にはＳＫ461・ＳＫ462が並び、西側にはＳＫ460・ＳＫ459が並んでいる。「木道」の延長上３m先にもＳＫ457が存在するなど、貯蔵穴が数多く存在する。このことから、「木道」は本来数mにわたる施設であったものか、これらの貯蔵穴の足場として単独に作られものか不明であるが、複数枚数によって構成されていたのであれば、後の洪水砂によって、貯蔵穴群が埋められていることから、その他の「木道」施設は、洪水等によって河川の下流方向へ流されたとも考えられる。

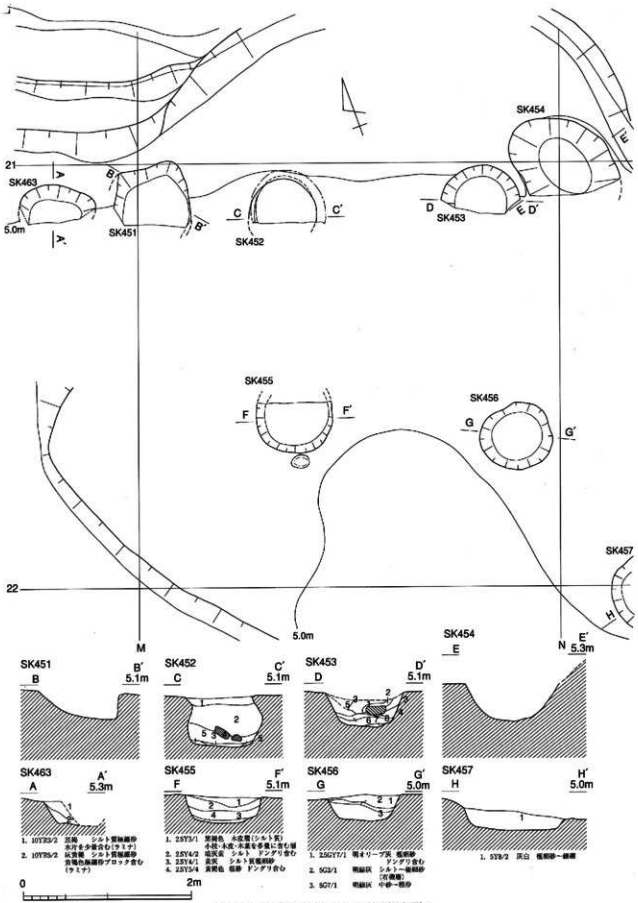
貯蔵穴と考えられる土坑が14基検出されたが、検出できた土坑の内、11基は比高差2mの崖面下の傾斜変換点付近の平坦面にほぼ１列に並んでいる（第39・40図）。木道付近では部分的に２列並んでいるようにも思えるが、全体的に近接している状況である。その列から1.5mから2m離れて３基（ＳＫ455・456・457）が点在する。詳細は別表の通りである（数値はいずれも検出時での値）。

土坑の堆積土は低湿地に作られたこともあり最下層から中層付近にかけてシルトや細砂の互層からなり、上層では粗砂が充填している。ＳＫ452・453・455・461など多くの土坑埋土からは一様にイチイガシの実が検出されているが、最下層付近ではほぼ純粋にイチイガシが見られることから、これらの実を貯蔵していた貯蔵穴であることが判った。またこれらの貯蔵穴の中層から上層にかけて、オニグルミやクリなどの多種にわたる堅果類と共に土器などの遺物も混入していた。

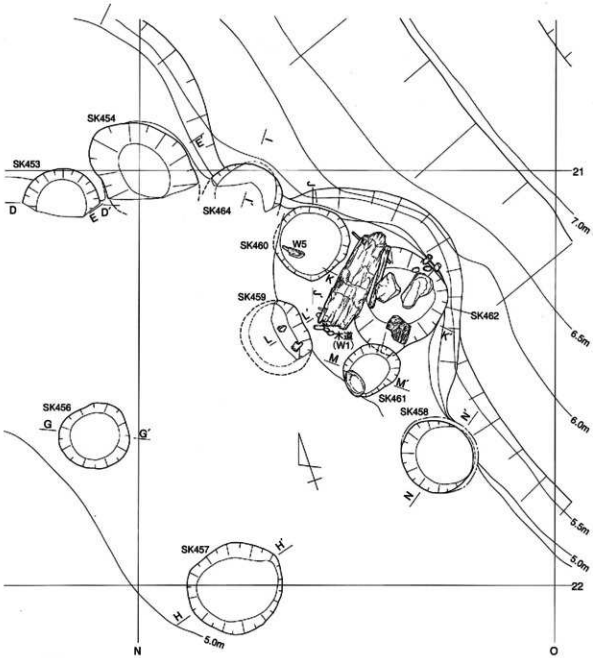
Ｌ21からＬ23区にかけて、溝状遺構（ＳＤ451）を検出した。幅は５m以上、深さ30cm程度である。このＳＤ451の埋土内から、北白川上層式３期から一乗寺Ｋ式への移行的様相を示す土器が比較的まとまって出土した。またこれらの土器の器壁表面には煮炊きに伴う炭化物がこびりついているものなど、遺存状態は良好である。また、Ｌ23区では板状木製品（Ｗ６）も出土している。長さ86cm、幅18cm、厚さ６cmで、材質はクリであると考えられる。Ｗ１の木道のように固定されたものではないが、おそらく、遺構或いは遺物の一部と考えられる。

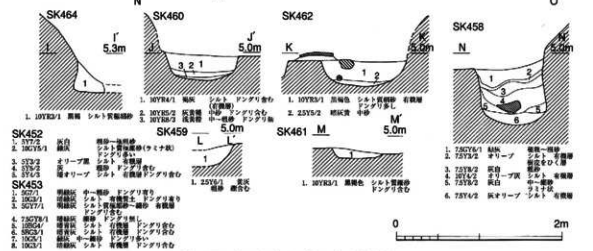
第７表　南区縄文下層貯蔵穴一覧表

No.	地区	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	断面形態	深さ／長径(cm)
SK451	南	100	80以上	30	隅丸方形	0.3
SK452	南	80	50以上	60	円形	0.75
SK453	南	90	60以上	40	円形	0.44
SK454	南	120	90以上	45	不正形	0.38
SK455	南	90	60以上	30	円形	0.33
SK456	南	85	80	30	楕円形	0.35
SK457	南	120	110	25	楕円形	0.21
SK458	南	90	90	70	円形	0.78
SK459	南	不明	不明	20	不明	不明
SK460	南	90	90	30	円形	0.33
SK461	南	70	60	10	楕円形	0.14
SK462	南	120	100以上	30	楕円形	0.25
SK463	南	90	40以上	30	楕円形	0.33
SK464	南	90	20以上	30	不明	0.33

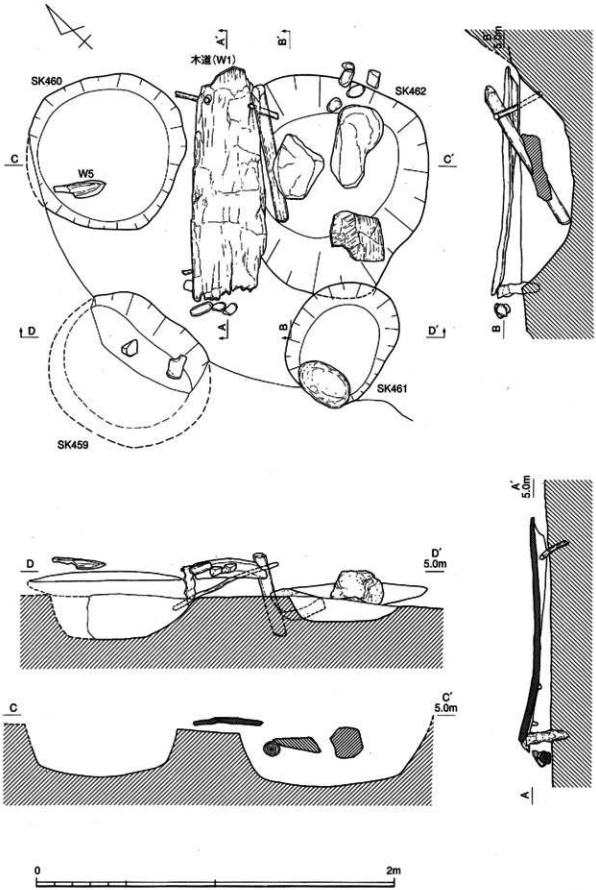


第39図　南区縄文下層低湿地貯蔵穴群-1





第40図　南区縄文下層低湿地貯蔵穴群-2



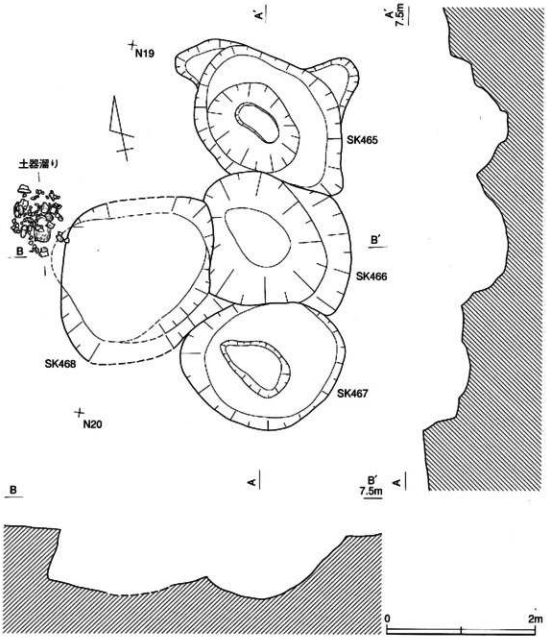
第41図　南区縄文下層低湿地木道・貯蔵穴群（N21区）

Ｎ22区からＯ22区にかけても溝状遺構（ＳＤ452）を検出した。南東側では最大幅２ｍ程度で、深さ25cmであった。埋土内からは石剣・石刀類（図179図　Ｓ4043）が出土した。

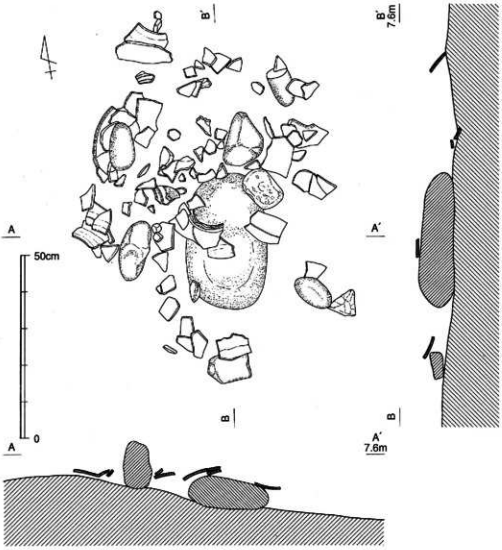
また木道付近の覆土である有機質堆積層から、木製鉢（Ｗ５）や編物（Ｗ７）が出土した。出土した原位置から遊離した状態で確認したので、「木道」および貯蔵穴に伴うものかは不明である。鉢はケヤキ材で、編物の材質はヒノキである。いずれも遺存状態は良好である。

ｂ．23層（３期－２）

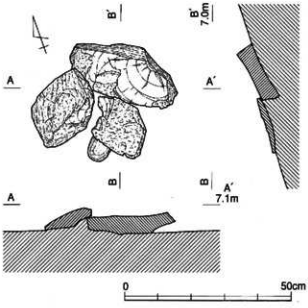
この23層は暗青灰色の細粒シルトで、前節記載の貯蔵穴群を覆うように堆積している。主にＫ～M21ライン付近を中心とする、ラミナ状を示し、洪水によって堆積したと考えられる。縄文時代後期中葉土器片（北白川上層式３期～一乗寺Ｋ式併行期）を含む。



第42図　南区縄文下層土坑群（SK465～468）（N19区）



第43図　南区縄文下層土器溜り（M19区）



第44図　南区縄文下層サヌカイト分割原石の集積（M20区）

c．14・15層（3期－3）

N21区付近の崖斜面の窪地状の場所に堆積している。14層は暗灰色の極細砂～細砂、15層はオリーブ灰色の極細砂で、いずれも河川堆積物である。23層同様に、北白川上層式3期～一乗寺K式併行期の土器片を含む。この層は堆積後、12層の堆積時に削られているようで、その後10層・8層が堆積している。

d．12・19層（3期－4）

19層は暗緑灰色の細粒シルトで、L21区付近に存在し、23層の上位、11層の下位にあたる。また、黄褐色砂による12層はM21区付近に厚く堆積し、最大厚100cmをはかる。23

層・19層の上位、11層の下位の位置関係である。12・19含まれる土器は、量的に少ないうえ、器壁表面の磨滅が著しい。。

ｅ．13層：暗灰色土層（３期－５）

暗灰色のシルトで、出土土器には一乗寺Ｋ式の新相のものを認めることができる。Ｌ21区付近に存在し、最大の層厚は30cmである。

ｆ．11層（３期－６）

緑灰色シルト質極細砂と褐色細礫とのラミナ状堆積で、Ｌ21区、M21区付近に堆積する。21ラインで最大40cmの層厚を示す。

２．　下層文化層：４期

ａ．９層・10層：暗褐色土

暗褐色の細砂土で、Ｋ21・Ｌ21区付近に存在する。土器型式では、一乗寺Ｋ式の新相のものから元住吉山Ｉ式の１期に比定できるものがまとまっており、完形近くに復元できる土器も存在する。その他、赤色顔料が付着した石皿や、イノシシ・シカなどの獣骨類を大量に含む。21ラインでの層厚は、最大50cmを示す。

Ｎ21区付近では、層厚約10cmの10層が堆積するが、この10層では元住吉山Ⅱ式土器を含まない点から、９層と同様の堆積時期を想定したい。

３．　下層文化層：５期

ａ．８層（縄文黒色）

黒色のシルト質極細砂で、最も多くの土器片・石器や獣骨の出土をみた。元住吉山Ⅰ・Ⅱ式土器などを多量に含む。21ライン断面ではすべての地区で確認され、屋面斜面に堆積し、最大の層厚は60cmである。この層では、所々で土器片や獣骨片の量が勝り、それらの隙間に黒色のシルト質土が堆積している様な状況の部分も確認した。また、大形のサヌカイト素材（長さ34.7cm、幅16.2cm、厚さ7.2cm、重さ4820gなど）もまとまって検出されている（第44図）。以上のような状況の中、完形に復元できる土器も数多く存在する事から、この土層は、人為的な廃棄活動によって、形成したと考えられる。

Ｌ20区やＬ21区では、この層の下位に９層が堆積するが、それとの境が明確ではなく、９層と13層の出土遺物に一部混在が認められる。

ｂ．２層直下の遺構（微高地上の遺構）

２層は縄文および弥生土器が出土する黒色包含層であるが、８層の縄文黒色土層とは層位的にも異なる。２層直下において最下層文化層である個２期の遺構も検出されており、この面に各時期の遺構が存在する。ここで報告する遺構はいずれも２層直下で検出された遺構であるが、８層の縄文黒色土層が堆積していた。

ＳＫ465～ＳＫ468はＮ19区で検出された４基の土坑である。いずれの土坑とも楕円形を呈し、直径2.2～2.5m、短径1.7～2.1m、深さ0.8～1.0mを測る。断面形態は中央が一段下がるものＳＫ465・ＳＫ467

があり、西側に土坑下場が抉り込むものＳＫ468もある。これら４基の土坑はいずれも接しており、何らかの関係があると思われるが、出土遺物もなく、その他この土坑の用途を限定しうる材料が検出できず、性格は不明である。

土器溜まりはM19区で検出されたもので、前述のＳＫ468西側に接する。土器溜まりと呼称しているが、土器（826）のほかに石鏃（Ｓ3087）、扁平な石材、拳大の礫、軽石などが南北100cm、東西70cmの範囲に集中的に出土している。広口浅鉢826は個５期のもので、周辺からは同時期の注口土器片も出土している。遺物等を除去し、下面を精査したが土坑などの遺構は検出されず、性格は不明である。

４．　中層文化層：５期併行期

ａ．６層（中層相当層７）

オリーブ灰色の細砂と粗砂のラミナ状堆積物で、凹線文（宮滝式）土器を含む。土器の様相は古新混在の様相をみせ、土器片表裏の磨滅が著しい。洪水等による堆積と考えられる。８層同様21ライン断面ではすべての地区で確認され、Ｎラインでは、20区から22区まで存在する。Ｎ21区付近で最大厚は80cmである。

第２節　液状化跡

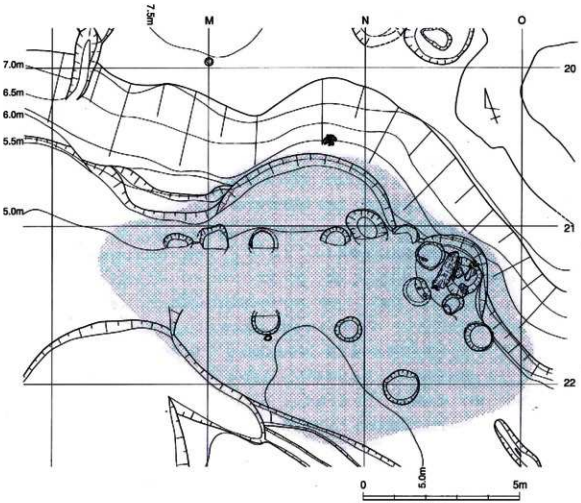
（深井）

縄文後期の土層関係を発掘する過程で、小規模な液状化跡を検出した。検出場所は南区M20-5区の縄文8層の下面で微高地から低湿地にかけての傾斜面で、9層上面にて北東-南西方向の砂脈が1本検出された（第45図赤色箇所）。この砂脈は幅0.8cm、長さ90cmであり、僅かに屈曲する形である。噴出源は2.5Y8/6細砂であるが、噴出による盛り上がり面は検出されなかった。また砂脈の分布状態は周辺において詳細に検出を試みたものの、この1本が確認されたのみである。

この砂脈は中世面で検出された液状化跡と比べて、小規模であるが僅かに細粒の砂が充填しており、液状化跡の可能性があると判断して、断ち割りを行った。その結果、検出された面から下層60cmにて同質の砂層があり、そこから砂が供給された液状化跡であることが判明した。

この液状化跡は縄文後期中葉12層（個３期直後）の堆積土内から供給され、9層（個４期）を引き裂き、8層堆積以前に噴砂を生じさせている。このことから、個４期（縄文後期中葉の元住吉山Ⅰ式１期）の所産と考えられる。なお12層の堆積範囲は第45図青色部に示した。

縄文時代と考えられるこの液状化跡は第11章第15節に楽川　旭氏の考察に詳しく記されているが、この液状化跡は噴出時の盛り上がりはないものの、縄文時代後期中葉の土器型式の土層間で終息しており、



第45図　南区縄文下層液状化跡（噴砂）検出位置図

写真23　南区M20区縄文時代噴砂検出状況

写真24　噴砂の状況

噴出時期を把握するには良好な資料となろう。

縄文時代の液状化跡の例は全国的には十数例あり、近隣では神戸市東灘区郡家遺跡ではアカホヤ火山灰降下（7,300年）直前の液状化跡が検出されている。本例は縄文後期中葉のものと考えられ、現在までには本例以外に詳細な時期を特定できるような噴砂例はない。

この液状化は震度6以上の揺れにより発生するものと考えられており、南海トラフ或いは六甲断層系や淡路島各地の断層を起因とする地震により発生した可能性が考えられる。

第３節　土器・土偶

（岡田・深井）

１．下層遺構出土の土器（第46～50図）

黒色地山を掘り込んで設けられた各種遺構の埋土には、土器片が少量ずつ混入している。時期は後期中葉・北白川上層式３期から一乗寺Ｋ式併行期にあたる。器壁には炭化物がこびりついている状況が認められ、遺存状態は比較的良好である。

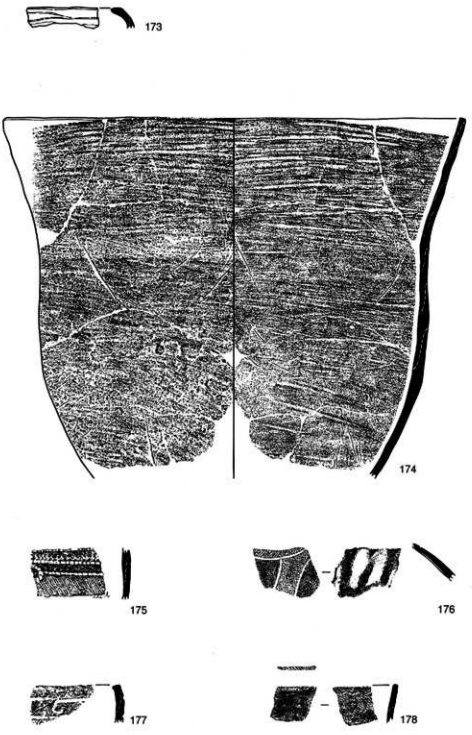
ＳＫ456；173は強く内彎する口縁の端部をなでて面を作る無文のものであるが、器形等は不明である。ナデは粗い。

ＳＫ457；175は深鉢の胴部で描線は密な刺突沈線を用いる。最上帯には二枚貝腹縁刻みによる振縄文、中央帯には細かいＲＬ縄文が磨消手法で施文され、その間には逆「６」字状単位文が配される。176は内面の調整不徹底なことから注口付土器の体部と思われる。ＬＲ縄文を施す。胎土には雲母を多混し、その他と若干異なる。174は無文粗製の広口深鉢、口縁部はやや内彎気味である。内外面には横走向の巻貝条痕調整が顕著にみられるが、体部下半内面のみナデ消しがおこなわれている。器壁には炭化物が残存している。

ＳＫ460；平口縁の177には水平沈線から垂下する「Ｃ」字状の単位文が描かれる。右末端を刺突する沈線は太め、ＬＲの磨消縄文である。178は口唇部及び口縁内面にＲＬ縄文の施された広口深鉢。内面の上端添いには縄文結節部が回転施文されている。

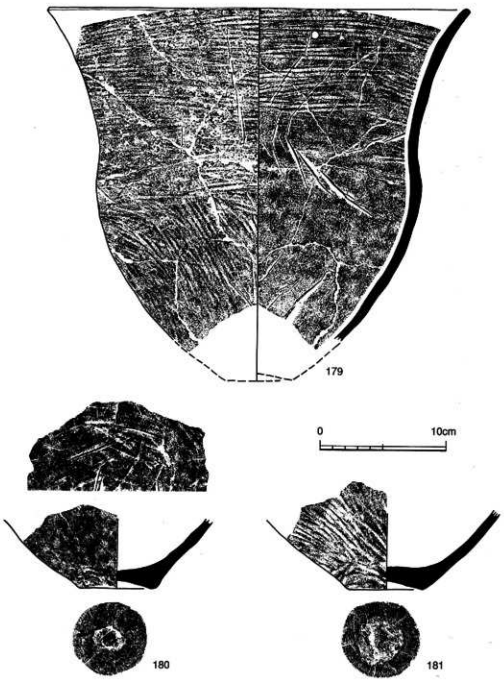
ＳＫ462；無文広口深鉢179の口頸部はしっかりと外反し、面取りある口唇部に収束する。外面は巻貝条痕顕著で、腹部の最大径部分より上位は右から左の横位、以下は右上がりの斜位に調整されている。それらは何往復かの反復運動によって一単位をなすが、その移行方向は腹部の上下で相反している。内面には上位のみ条痕が認められ、下位は板状の工具で横位になでられている。180、181はともに深鉢底部。中心がより強く凹み、外縁が平滑な面を持つ二段構成のヘソ状凹底である。180の外縁平滑面は中心部から剥離しているようにも見受けられ、また、内面にも条痕が顕著である。

ＳＤ451；182から188は波状口縁深鉢形土器である。182は内彎する口縁部の先端を内折させてナデ、無文とする。欠損の波頂部直下には上弦の重弧沈線文を配し、沈線施文後、細かめのＬＲ縄文を充填する。183は類似の施文手法による胴部破片で、重弧線により同心円状の意匠を構成する。ただし、それらは弦側を対向させて横位に展開するものである。184も内彎する口縁部であるが器壁は薄手。縄文は細かめのＲＬで沈線施文前に全面にわたって施され、上端に添って一帯のみ、結節部を回転施文している。円棒状工具を用いた末端刺突の沈線はやや太め、磨消手法は顕著に認められない。186は若干内彎する口縁部に平行沈線を引いたうえ直前段３本撚ＬＲを充填している。187は沈線間の直前段４本撚ＲＬ磨消縄文。185もまた内彎口縁で、結節縄文を全体に施文後、沈線間を磨り消している。浅鉢形土器の可能性もある。188は４単位波頂に復原される。口縁部は外見「く」字状に内屈するが、対応する内面は外へ張り出すように強くなでられることにより明瞭な段をなす「内彎内屈」口縁。文様は外面屈曲部の上下に分かれ、上にはＲＬ縄文が施され、磨り消された平行沈線間波頂下には、最上位の沈線から連続して軽い渦巻文が配される。屈曲直下には沈線のみ描かれ、以下頸部無文である。沈線とともに段状に画された胴部は緩やかに球状に張り、広い磨消縄文帯を確保している。最上帯は縄文結節部を回転施文し、その下の磨消部分に渦巻状単位文を配する。単位文はその両側を水平沈線によって切られていることから先に描かれたものである。縄文は直前段４本撚、細めのＲＬの横位回転によるものである。

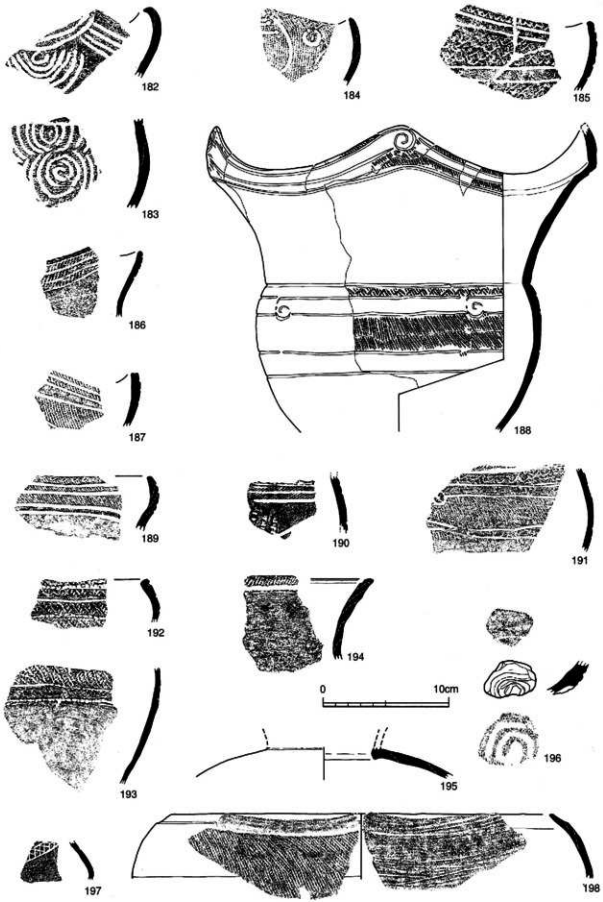


SK456：173
SK457：174～176
SK460：177～178

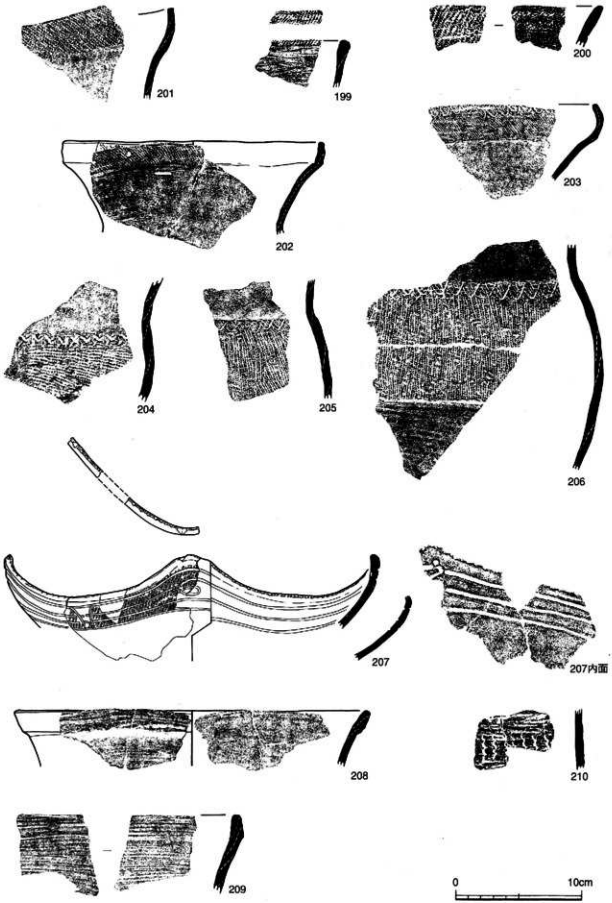
第46図　南区縄文下層遺構出土後期土器（SK456～460）



第47図　南区縄文下層遺構出土後期土器（SK462）



第48図　南区縄文下層遺構出土後期土器（SD451）-1



第49図　南区縄文下層遺構出土後期土器（SD451）-2

内外面とも炭化物による被覆が見られる。深鉢胴部190は多数竹管状工具による縦位の押し引き沈線文が配されており、その他は平行沈線と斜沈線にＬＲ縄文が充填された文様構成である。191も深鉢胴部で188同様の形制を呈する。縄文原体は細かめの直前段３本撚ＲＬに付加条したものと思われ、最上帯にはその折り返し部分を絡げたものが回転施文されている（絡げ縄）。下半が中央帯に貫入するものの、磨消部分に配された単位文は渦巻状を呈し、その一部が右側の水平沈線に切られている。下位枠状文の縄文磨消は若干甘い。

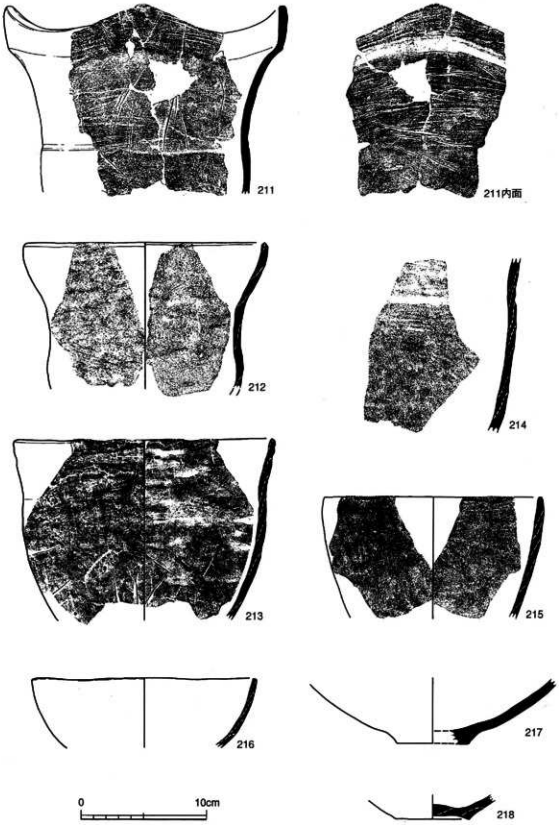
189、192は平縁深鉢の口縁部。189は外反する頸部に内彎気味の口縁部がのる内彎内屈口縁。直前段４本撚ＲＬ縄文地に平行沈線を引き、上端には結節部の回転施文をする。192はＬＲに一段の縄Ｒ１を逆に巻き付けた原体による縄文地に平行な刺突沈線文を描いている。193は同一個体の胴部であろう。

195から197は注口付土器。195は肩の張った胴部に広がる口頸部のとりつく器形となろう。外面は丁寧に磨かれている。196は注口部の付け根下腹部にあたる。渦巻状の平行隆起線が配されている。なお、内面には粘土帯接合痕が観察され、注口部の成形手法を窺わせる。197は胴部、斜位の平行沈線間に刻みを「Ｘ」字状に充填している。198は胴部の張る器形、口縁上端外面のみなでられており、以下には直前段３本撚ＲＬ縄文が施文される。内面条痕地には横方向に移動するようにして爪痕が散在しており、外面の施文時に残されたものと考えられる。

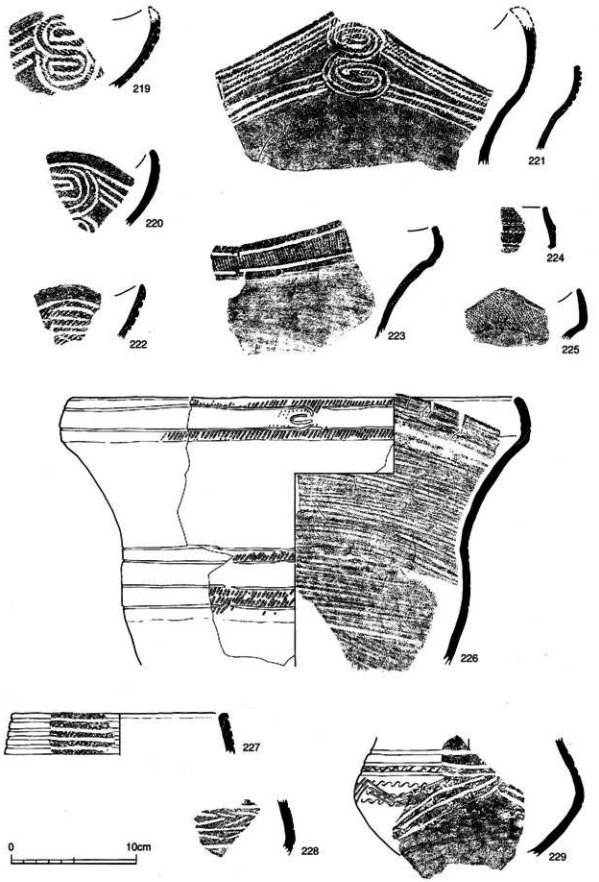
縄文地の一群は沈線等による施文を持たない。201は波状口縁深鉢で、口縁部は緩く「く」字状に屈曲気味を呈する内彎内屈口縁。ＲＬ縄文が施文される。202、203は平口縁深鉢。内彎内屈口縁203の上端には絡げ縄の回転施文がみられる。直前段４本撚ＲＬ。202は「く」字状に屈曲する口縁部にＲＬ縄文を施文。胴部にも縄文施文がみられたようである。204から206は深鉢胴部。太めのＬＲ縄文を縦位に回転施文する204は、頸胴部が緩やかなくびれにより画されているのに対し、205、206は直前段４本撚ＲＬの斜位回転施文、頸胴部界は段状に泰然と画される。頸胴部界直下には結節縄文あるいは絡げ縄が一帯施文されている。199、200は広口深鉢口縁部。199は肥厚した口唇部のみＬＲ縄文、一部外面に及ぶ。200は内外面ともにＬＲ縄文施文、ただし内面は上端部のみに限られ、結節縄文が配されている。外反する口頸部をもつ広口深鉢194は、口縁内面にひかれた水平沈線より口唇部にかけＬＲ縄文が充填される。

207は４単位波状口縁浅鉢で、内外面に文様を持つ。口縁端部は磨り消され、内折気味となり、口唇部には大ぶりの刻みが施される。波頂部分の単位文様は欠損のため不明瞭であるが、偏平な渦巻状を呈するものか。内面には刺突を基点とした蛇行沈線が縦位に施され、それを巡って３本の平行沈線が配されている。関東地方・加曽利Ｂ１式併行期の浅鉢の影響下に製作されたものと考えられる。210は外面二枚貝条痕調整による胴部破片と思われるが、二枚貝腹縁刺突列が施されている。施文に使用された二枚貝はその他の土器に見られるものより大振りなもので、搬入品と考えられる。当該期に同様の工具を用いるものに南部九州地方の丸尾式等あるが、本個体の器形や施文手法はそれらとは相違している。

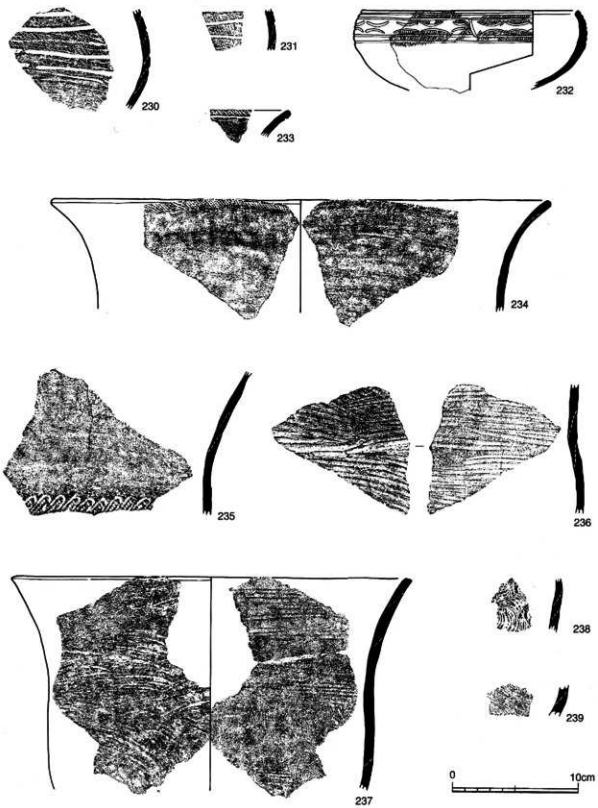
208から216は文様を持たない無文土器である。208は口縁部外面を段状に肥厚させる広口深鉢。209は口縁を僅かながら「く」字状に内屈させる深鉢であるが、屈曲部における粘土紐積み上げ時の作り分けは観察できない。内外面とも巻貝条痕による調整が顕著である。一方、211の外面は巻貝条痕後丁寧なナデが施されている。「く」字状に内屈する波状口縁深鉢で、波頂部は４単位であると推定される。214は深鉢胴部。211同様に頸胴部界は頸部から一連の巻貝条痕による段をもって画される。212は口縁部が内彎する広口深鉢。横走向のナデ調整を基調にするが、体部下半は右下がり斜走向とする。213も広口



第50図　南区縄文下層遺構出土後期土器（SD451）-3



第51図　南区縄文下層23層出土後期土器-1



第52図　南区縄文下層23層出土後期土器-2

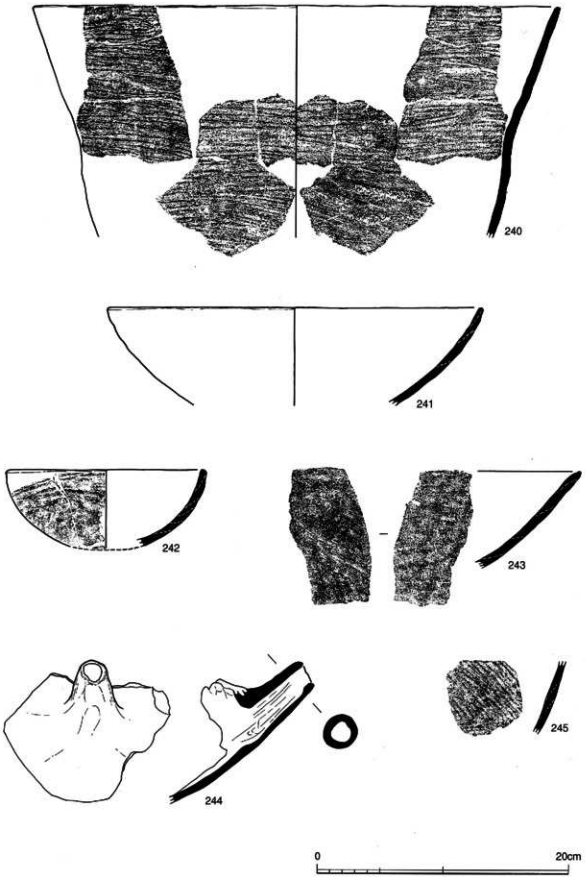
深鉢であるが頸部のくびれが弱く砲弾形に近い。また体部下半は下から上への縦走向ナデ調整である。本個体の胎土はその他と若干様相が異なる。215は砲弾形の深鉢。内面の横走向ナデ調整に対し、外面は縦走向。比較的丁寧である。216は器壁薄手な椀形浅鉢。217、218はともに径の小さい深鉢底部であるが、前者は平底、胴部下半にあたる内面に炭化物の付着がみられる。一方、後者の底面は弱く凹むが、その突出した外縁の一部は潰れている。

2. 23層出土の土器（第51～53図）

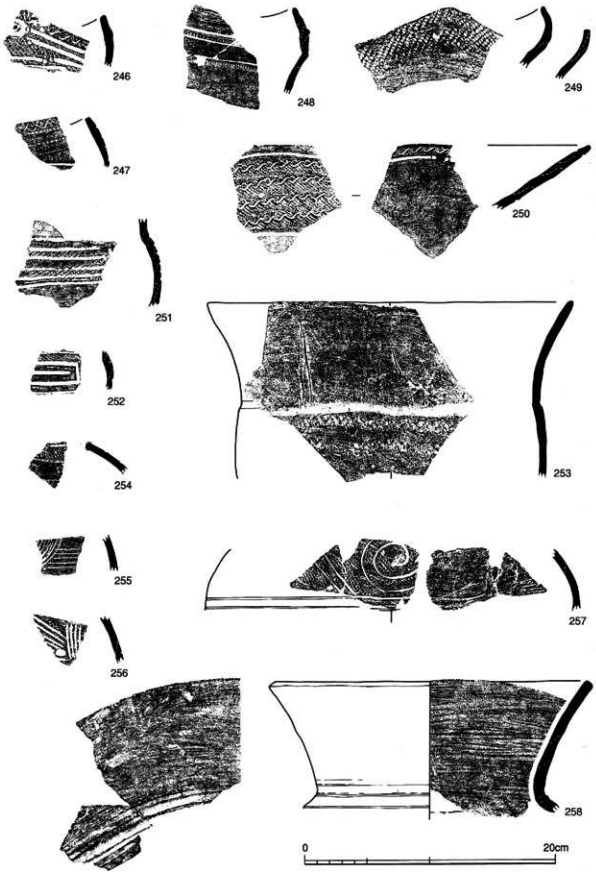
後期中葉、北白川上層式3期から一乗寺K式併行期相当のものが認められる。

219から225は波状口縁深鉢の口縁部。内彎して立ち上がる219から222の波頂下には、「S」字ないし逆「S」字状を呈する渦巻文を配し、両脇に派生する平行沈線施文部分ともどもＬＲ縄文が充填されている。ただし219のみＲＬ。これらは大阪府淡輪遺跡で数多く検出されており、北白川上層式3期の標徴ともされる一群である。うち221は頸部まで残存し、外反頸部から内彎口縁に緩やかに移行するなかに口縁部文様帯下限が平行沈線によって比較的明瞭に画されているのが特徴的。一方、内彎内屈口縁の223には縦走するＲＬ縄文地に平行沈線が描かれるが、上端の絡げ縄施文と思われる部分のみ、すべて消えない程度に磨り消されている。224は口縁部上半無文で下半と段をもって画される「有段」口縁。一乗寺K式波状口縁深鉢の標徴の一つである。上半無文帯とほぼ同じ幅を保つ下半は段のみでなく刺突沈線でも画され、そこで内屈角を変えている。下半帯の描線もまた刺突沈線で、平行に配したその上下はＲＬによる磨消縄文帯となっている。225は縄文地土器で、内彎内屈口縁の波頂部に直前段4本撚ＲＬ縄文を施す。226は平口縁深鉢であるが口縁部には単位文をもつ。文様は磨消により明瞭でないが、蛇行状のものを意識したような意匠である。胴部における単位文の有無は不明。直前段3本撚ＬＲの原体を用いた平行沈線間の磨消縄文である。また、内面の調整は特徴的で、口縁部から腹部にかけては横走向の巻貝条痕が顕著なのに対し、以下は条痕後ナデを施している。227も平口縁であるが器形は判別できない。厚手の器壁をもち、5本以上になる平行沈線文にＬＲ縄文を充填している。228から231は深鉢胴部。228は胴部文様帯が屈曲をもって画され、平行沈線文を基調とした文様が帯状に展開する。千鳥足状の羽状沈線文が配され、細かめのＬＲ縄文の充填が確認できる。外面に赤色顔料が付着する。生地精良な229の腹部の張りは顕著で、鋸歯状に展開する3本一組の平行沈線文はその上に収まりきらない。地文としてＬＲの結節縄文が多段に配されているが、後の磨消のため不明瞭である。一方、230は屈曲こそしないものの文様帯下限がナデにより明分されている。細かめのＲＬによる縄文地に若干太目の工具をもって右端を刺突する平行沈線文を描き、その間を丁寧に磨り消す。231は縄文に代わって縦位の条線地に平行沈線が描かれた体部破片。類例は少ないが描線の様相からしても同時期に属すであろう。注意されるべき特徴である。232は底部より内彎して口縁部にいたる平口縁浅鉢。平行沈線間の口縁部文様帯には上下対弧になる弧線文が展開し、ＬＲ縄文が充填されている。縦位区切りの単位文も認められる。

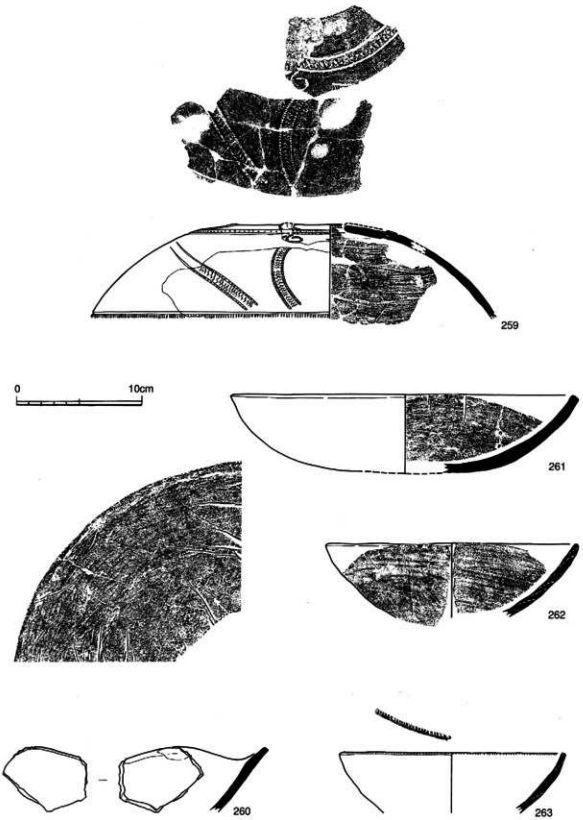
233、234は広口深鉢の口頸部で強く外反する。両者とも肥厚せず、口縁部外面にＲＬによる縄文帯をもつが、前者は沈線で下限されるに対し、235、236はともに深鉢頸胴部。胴部に直前段3本撚ＬＲ縄文を施すことにより頸胴部界を画する235は、原体を折り返した部分が明瞭に押捺されている。一方の236は無文であるが、内外面顕著な巻貝条痕調整による段をもってそれが明瞭に分かたれている。237は無文広口深鉢。頸胴部界は明瞭でないが、外反する口頸部は横走向、胴部は右下がり斜走向と外面の巻貝条痕調



第53図　南区縄文下層23層出土後期土器-3



第54図　南区縄文下層14・15・23層出土後期土器-1



第55図　南区縄文下層14・15・23層出土後期土器-2

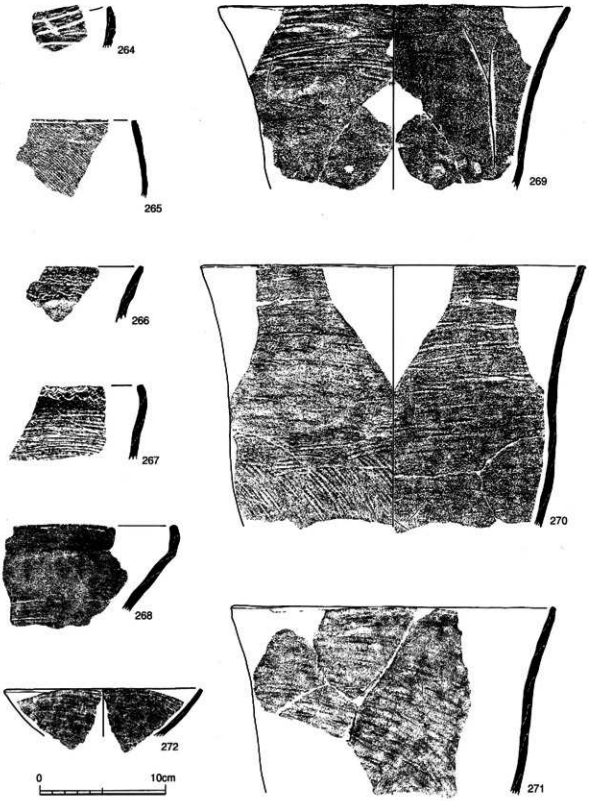
整を遠えている。238、239は後期前葉に比定される可能性ある体部破片。238の調整は櫛歯状工具により、239は刷毛目状の調整がみられる。240は無文広口深鉢。内外面とも横走向の巻貝条痕が顕著である。ただし胴部内面はなでられ、一部ケズリ状を呈する。本個体付着の炭化物より放射性炭素年代測定用試料を採取した。241から243は皿形浅鉢。内外面とも条痕後の丁寧なナデによって仕上げられる。口唇部に面取りをもたない243は、内面が著しく赤色化しており特異。244は無文の注口付土器。注口部は球状を呈する体部の成形と一体化しているような外観をもつが、内面はなでつけ痕以外非連続で、別途取り付けたものと考えられる。245は遺物取り上げ時に土製円盤の可能性を指摘されている深鉢体部破片であるが、破断面に明瞭な加工痕跡等認めがたく判断は難しい。この手の遺物の抽出は十分でない可能性がある。

３．14・15および23層出土の土器（第54・55図）

23層同様、北白川上層式３期から一乗寺Ｋ式併行期の土器群である。

246から249は波状口縁深鉢の口縁部。246は上端に結節部を回転施文した直前段４本撚と思われるＲＬ縄文地に太めの沈線で文様を描く。波頂部には円文を配し、両側の平行沈線は末端を刺突する。内彎内屈口縁となろう。口唇の一部に焼成前に加工された凹みがみられる。247は内屈口縁。沈線内には密な刺突を施しており、その間はＲＬ磨消縄文。上端には結び縄が配される。248は内屈する有段口縁で、口縁部下半の平行沈線文上下には垂直刻みを施す。一乗寺Ｋ式の口縁部成形手法に対比できるが、口唇部の面取りや刻みはみられない。249は内彎口縁の外面に太めのＬＲ縄文を施している。250は内外面とも有文の皿形浅鉢。両端刺突沈線間に結節部を多段に回転施文した直前段複数本撚りのＲＬ縄文。外面縄文帯上限の沈線は数ヶ所で押し引いている。253は縄文地の広口深鉢。段で画された胴部には、複雑にみえる結節縄文が施文されている。胎土が他とは異なっており、所謂生駒西麓産のものに類似する。251、252は深鉢頸胴部。251は平行沈線文に直前段２本撚りのＬＲを充填。252は直前段３本撚と思われるＲＬ磨消縄文に雷文状の意匠を描き、東北九州地方の北久根山式併行期の土器に類似する。外面に赤色顔料が付着している。

254から259は注口付土器。254は頸部直下で、外反する口頸部が取り付こう。平行刺突沈線間に直前段３本撚と思われる磨消縄文。255、256は多重沈線によって文様が描かれる特徴的な土器で、関東地方・加曽利Ｂ１式のそれに類するもの。両者とも渦巻状意匠は体部上半内で下限されるようである。それぞれ施文工具は異なり、前者は後者より細い櫛歯状工具を用いるが、その間隔は不均一である。257は平行沈線文によりＲＬ縄文地に描かれた渦巻状文および斜線文。258は口縁がラッパ状に外反して広がるが、胴部も同様にして扁平に開く。平行沈線以下の文様は不明。259は段をもって画される口縁上半無文帯に凸帯の剥離した痕跡、その直下に「６」字状刺突沈線文を配しており、一乗寺Ｋ式の特徴をよく表わす。段で画された胴部上端には結び縄回転施文地に刺突列、以下の平行刺突沈線文には二枚貝腹縁による刻みが充填される。口唇部にも二枚貝腹縁刻みが施されるが、胴部屈曲部は垂直刻みによっている。内面の調整は刻み同様に小二枚貝を工具にしているものと思われる。263は口唇部に垂直刻みをもつが、以下は無文、丁寧にナデ調整された皿形浅鉢。261、262も巻貝条痕後にナデがなされている。260は波頂部内面が強めになでられ片口状を呈す。全体は丁寧な調整。内面には赤色顔料が付着するほか、片口部直下のみ外面にもその付着がみられ、用途を想起させる好資料である。



第56図　南区縄文下層12・19層出土後期土器

４．12・19層出土の土器（第56図）

264は波状口縁深鉢の内彎口縁と思われる。沈線文以外は認められない。265は内傾して立ち上がる口縁部上端に１本の沈線を描くほかは直前段４本撚りのＲＬ縄文。器形は判然としない。266は広口深鉢の口縁部で、幅広く若干肥厚する外面にＬＲの結節縄文が２段に施文される。267も同様部分の施文。ただし、口縁は肥厚せず内彎している。268は内彎内屈口縁をもつ無文平口縁深鉢。横走向の条痕後ナデ調整が施されている。269から271はいずれも外反する口頸部をもつ無文広口深鉢。三者とも頸胴部界はやや不明瞭であるが、270は胴部右下がり斜走向の後に口頸部横走向巻貝条痕により調整することで分帯意識がうかがえる。269と271の外面は右下がり斜位から横走向にかけてのナデ調整、特に後者は軟質時のものかナデ痕顕著である。内面はすべてナデ調整であるが、270の上半には下地の条痕調整が残っている。272は浅い皿形浅鉢である。

５．13層出土の土器（第57図）

一乗寺Ｋ式新相の土器がみられる。

273は３単位となる波状口縁深鉢。内屈する有段口縁は明瞭な段をなさず一帯成形され、上半無文帯の波頂部に取り付く有刻凸帯は両側に沈線を添わせ短い。以下に単位文はみられず、波底部も口縁下半帯にて枠状に閉じる。これらは一乗寺Ｋ式でもより新相の特徴である。胴部は軽い段および屈曲によって文様帯が画されており、平行沈線を基調とした磨消縄文が展開する。最上縄文帯以下には逆「ノ」字状単位文が描かれ、その下の中央縄文帯は対弧に並列する括弧状弧線で区切られ枠状をなす。縄文原体は直前段４本撚と思われるＲＬである。摩滅顕著。274も波状口縁部で、有段口縁の範疇。ただし傾斜は変えるが段はない。ＲＬの磨消縄文を施す。275は深鉢頸胴部。273同様、屈曲で泰然と画された文様帯に平行沈線間ＲＬ磨消縄文。276は縄文地の深鉢胴部。太い沈線で画した以下の胴部には多段にわたり縄文結節部が回転施文されている。原体は直前段３本撚のＬＲ縄文である。277は底面が平らになる深鉢底部。比較的丁寧な調整が施される。

６．11層出土の土器（第57図）

278は深鉢頸胴部。文様帯の上限は軽い段および沈線で画され、以下平行沈線文を基調として展開させるが、中央縄文帯の下端沈線は途切れを繋ぐように若干下弦の弧を描く。縄文原体は直前段４本撚と思われるＲＬで、頸胴部界直上にはみ出た縄の折り返し部分が消され切らずに残る。内面は横走向条痕後軽いナデ調整。炭化物の付着がみられる。279は深鉢底部。中央粗、外周平滑となるヘソ状の凹底であるが外周部分は幅が狭い。体部調整は条痕後のナデ、内部は横走向になでられている。

７．９層（暗褐色土層）出土の土器（第58～66図）

一乗寺Ｋ式新相から元住吉山Ｉ式１期の資料が認められる。器種分類に従い解説を加える。

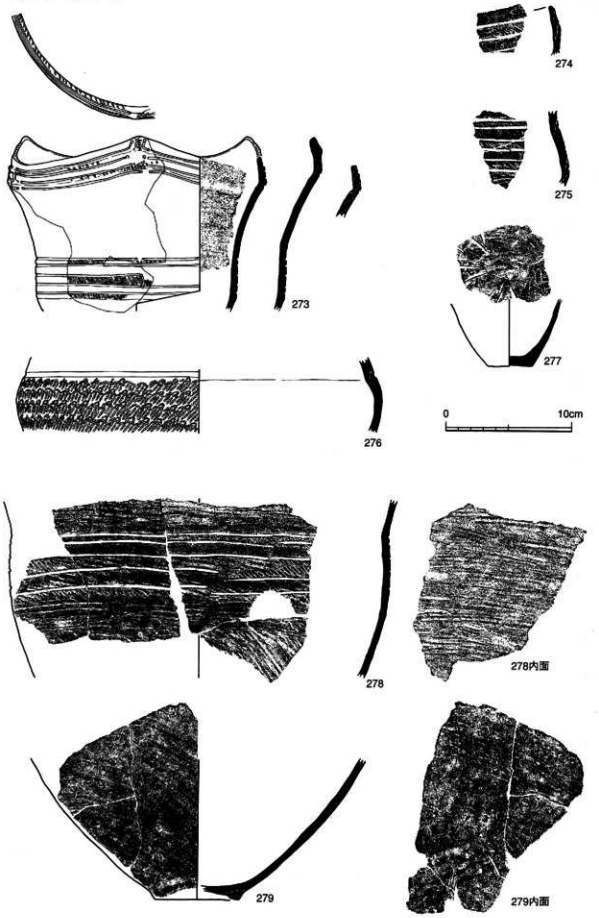
波状口縁深鉢（280～291）；280は内彎口縁波頂部、ＬＲ縄文を充填する。281は同様に頸部。口縁部文様帯は刺突沈線により描かれ、ＬＲ縄文を磨り消したものか。破片上端は擬口縁を形成する。内彎内屈口縁の282は、細かめの直前段４本撚ＲＬ縄文地に疎らに軽く押し引くようにして太い沈線文を描く。283の波頂部も直前段４本撚ＲＬ縄文地に上弦の重弧沈線文。外面屈曲部直下に文様帯下限の沈線が描かれる。284は有段口縁。波頂部有刻凸帯下には逆「ノ」字状沈線文が描かれるものか。ＲＬの磨消縄

文で、口唇部には斜刻みが施される。285も有段口縁であるが、上下が明瞭につくり分けられる。下半にはＬＲ縄文が施された後、２本一対の平行沈線で上弦弧線文が描かれている。内屈口縁の286は、屈曲上に３本ひいた平行沈線の最上線以上を無文帯とする。それ以下はＲＬの磨消縄文、両側沈線を添わす「ノ」字状凸帯を貼付する。ただし凸帯上は無文である。289は波底部に突起が取り付く例。屈曲部直下には沈線がひかれ、その末端となる突起下に刺突が打たれる。ＲＬ磨消縄文。同様の文様構成をとる290は波頂部に逆「ノ」字状有刻凸帯が配される。突起頂部には大きく開口した刺突が施され、突起両側には側沈線、突起下には沈線末端刺突が打たれる。内屈した口縁部は、289同様ＲＬ磨消縄文であるが、平行沈線間は明確に磨り消されている。291は波頂部に瘤状突起を貼付、その上を刺突する。内屈した口縁部には２本の平行沈線をひき、ＲＬの磨消縄文としている。287および288は他地域の影響を推定させる土器。前者は摩滅顕著、口縁部波頂部に若干の粘土を貼り付け、その頂部には刺突を施す。その直下は縦位の蛇行沈線、両側には３本の平行沈線文が配される。沈線施文部分は帯状を呈し、その部分に充填縄文が配される。北陸地方などの加曽利Ｂ１式併行期の土器の意匠構成に通じるものがある。後者の288は内屈した口縁部に取り付く突起で、屈曲部分で折損したもの。破断面の観察から、口縁部を内外から包むように突起が貼り付けられた様子が看取できる。器形は判然としないが、口径約16cmの小型品である。突起の正面観は両側ほぼ対称の山形を呈する。頂部は平らで刺突が穿たれ、突起の肩部にも斜め上方から工具でついたような刺突がある。他にも突起の内・外面に刺突が認められ、その先端は近接するようで通じてはいない。外面の刺突は対向する一対の弧線に両側から囲まれており、文様意匠、突起形状等から判断して西部関東地方・加曽利Ｂ２式でも前半の時期、３単位の突起が取り付く土器と考えられる。

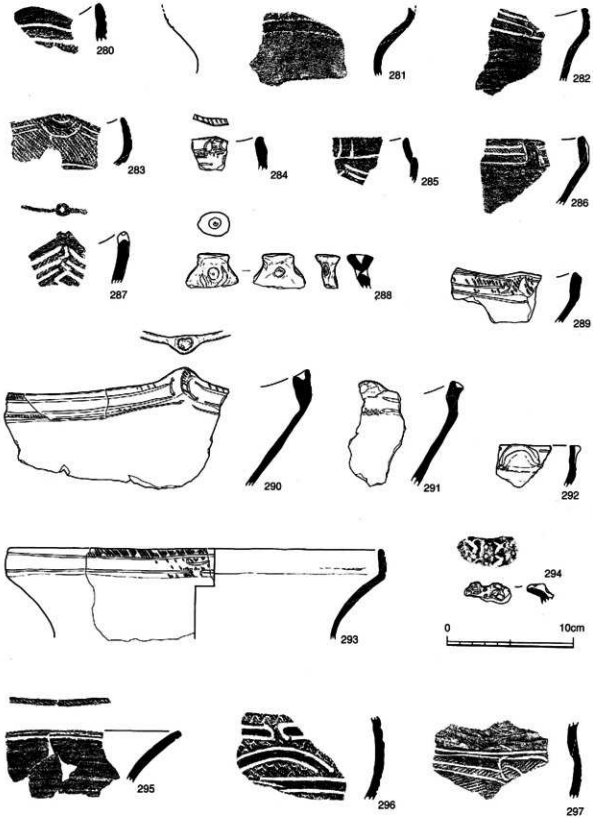
平口縁深鉢（292～294）；293は外反した頸部に取り付く内屈した口縁部に平行沈線をひき、細めの直前段４本撚ＲＬ磨消縄文とする。中央磨消部分には上弦弧線状とも表現しうる逆「ノ」字状沈線文が配されている。292は同じく平行沈線文であるが、無文。単位文として馬蹄形状の凸帯を貼付する。僅かに屈曲部に刻み状のものが認められる。294は小型深鉢と思われる。緩く内屈した口縁部に縦位隆帯を並列貼付し、隆帯上を「Ｘ」字状に刻む。隆帯間には刺突列が先端円形の工具で施される。特徴からは東海地方の蜆塚Ⅲ式に通じるが、刻み等の手法に相違が認められる。

広口深鉢（295）；外反して口頸部が伸び上がる器形。口縁部の肥厚等はみられず、唯外面に沈線をひき、口唇部にＲＬ縄文を施文する。

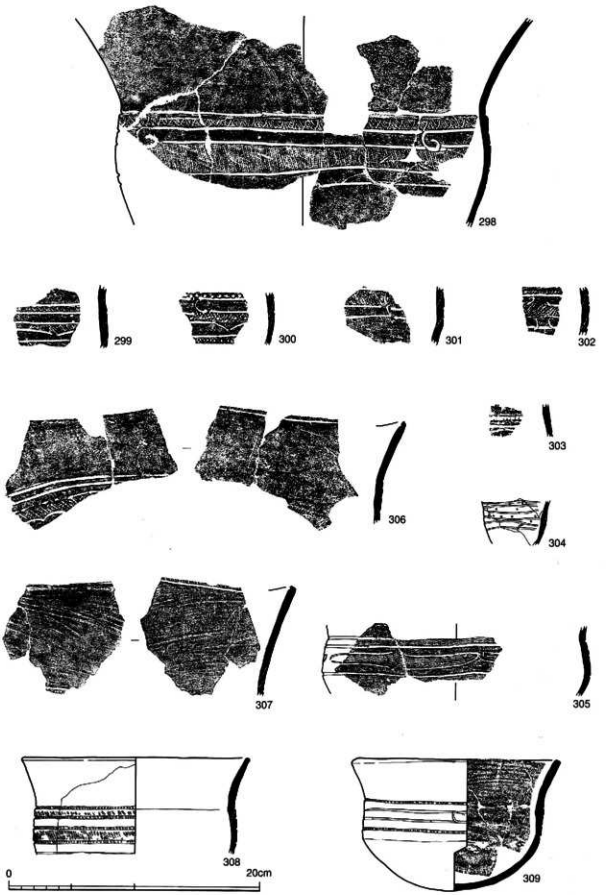
胴部（296～305）；多くは深鉢の胴部に比定される。296はＲＬの結節縄文を多段に施文したうえに太めの押し引き状沈線で文様を描く。297の頸胴部界は成形上の接合部に当たるが、外面では不明瞭。２本の平行沈線をひくことによって両者を画している。単位文として縦位に交差する対向弧線文が配され、その間を連結するように傾斜する平行沈線文が描かれている。ＬＲ磨消縄文。298は外反する頸部に緩く内彎する胴部が続き、両者は段および沈線によって画される。胴部文様帯は４本の平行沈線が幅広く配され、最上帯を絡げ縄、第二の中央帯を直前段４本撚ＲＬの磨消縦走縄文とする。最上帯下限の沈線からは「６」字状単位文がぶら下がるように後描されるが、本個体はそれが４単位で巡ることを明らかにしている。299、300は中央縄文帯の下限沈線が横渡りの長い下弦弧線文で表わされ、磨消部分をはさんだ下に最下縄文帯を設ける点、298とは異なる。両者とも直前段４本撚ＲＬの磨消縄文であるが、後者には刺突列が付加される。また、300は末端刺突沈線による逆「ノ」字状単位文が配されている。301の胴部は軽く屈曲し最下縄文帯が画されている。単位文は中央縄文帯を縦断する縦に間延びした



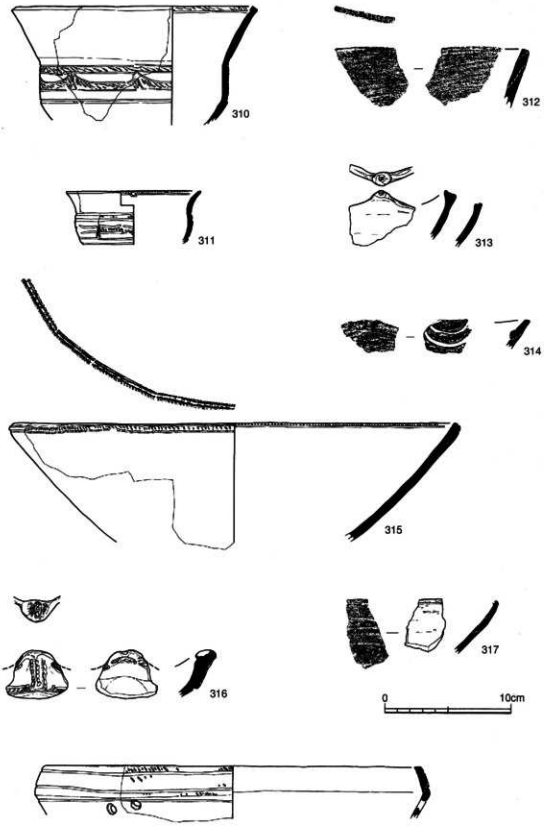
第57図　南区縄文下層13・11層出土後期土器



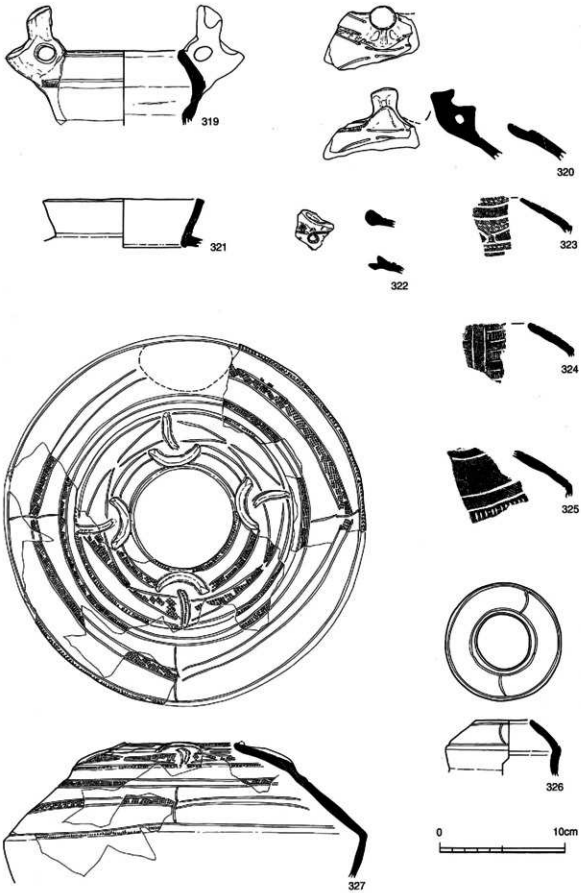
第58図　南区縄文下層9層出土後期土器-1



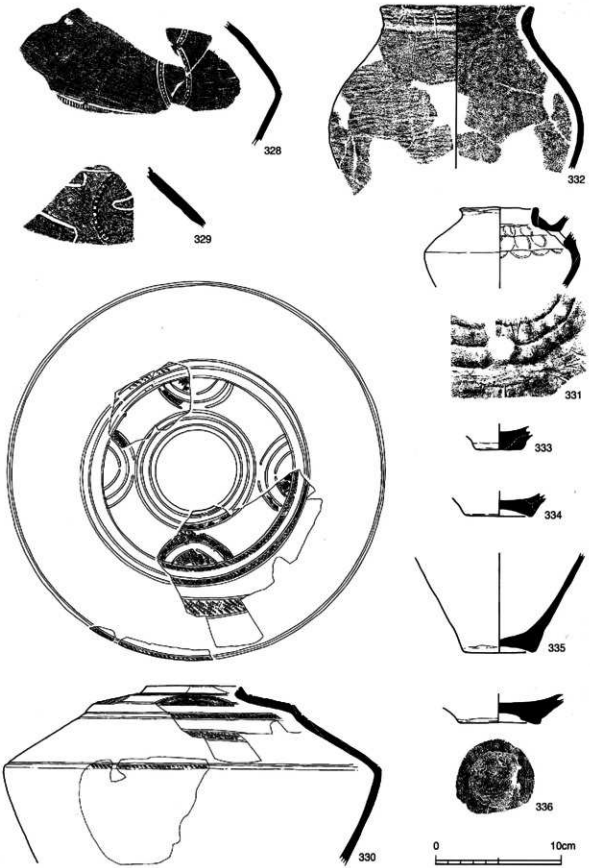
第59図　南区縄文下層9層出土後期土器-2



第60図　南区縄文下層9層出土後期土器-3



第61図　南区縄文下層9層出土後期土器-4



第62図　南区縄文下層9層出土後期土器-5

「Ｃ」字状沈線文である。前者同様直前段４本撚ＲＬ磨消縄文である。一方、ＬＲ磨消縄文を用いる302は上中下の各縄文帯を２個一対の外向する弧線文で連結したもので、全体として「十」字状縄文帯を構成する。303の頸胴部界は刺突列で画する。最上帯下は弧線文を配するようであるが不明瞭。304は小型深鉢。胴部全体に幅広く平行沈線文を描き、沈線間に刺突列を配す。下限の沈線に重複して、単位文にもみえる弧線文がある。305は明瞭な屈曲胴部に３帯の擬縄文帯からなる定型的な文様構成をとる。擬縄文は小二枚貝を押捺充填する手法。中央擬縄文帯は上限と下限の沈線が所々弧線状に連結され、内部を擬縄文充填された「つ」字状沈線文が交互に開口方向を違えながら並列するようである。

波状広口深鉢（306・307）；306は胴部まで残る破片。若干外反気味の口頸部は波状を呈すが波頂部の様子は明らかでない。口縁部内面には沈線がひかれ、巻貝の回転施文によると思われる擬縄文が充填されている。口頸部はナデ調整、頸胴部界は軽い段および沈線で画され、以下、定型的な文様構成をとるが、第２沈線で画された最上帯は無文、中央磨消縄文帯の上限は押し引き刺突列、下限は沈線による連弧文である。直前段３本撚のＲＬ原体。307の口縁部内面は垂直刻みにより充填されている。直行する口頸部は沈線により胴部と画され、直下にＲＬ縄文を施しているようである。

広口鉢（308～311）；308は外反する口頸部に内彎胴部が取り付く。頸胴部界は以下の描線同様、密な刺突沈線および段による。胴部文様帯は平行沈線間磨消縄文による定型的構成。縄文は縦走気味のＲＬである。309は屈曲胴部をもち、刺突沈線により口頸部との境界を画す。それをも含め４本の平行沈線により文様を構成し、下限の第４沈線内には刺突を充填、第２・３の沈線間に下の平行沈線と連続する区切り弧線文を配す。310の口縁部内面は二枚貝押捺擬縄文。同様にして胴部文様にも擬縄文を充填する。軽い段および沈線で画された胴部は定型的な文様構成をとるが、中央縄文帯上限沈線が斜位の弧を描き、上向する一端は第２沈線に接する。接点からは「ノ」字状沈線文が垂下し、そこに先の沈線の他端が添い、２本の弧線により上弦弧線文が構成される。単位文もまた、先記の接点直下、中央縄文帯中に逆「ノ」字状沈線文が配されている。小型の311は口縁部内面にも単位文をもつ。口頸部は外反顕著、内面には垂直刻みを充填した１本の沈線下に砲直した逆「ノ」字状沈線文を垂下させる。一方、定型的な文様構成をとる胴部には単位文は付されないようで、中央縄文帯上下の沈線が、523同様の対弧長弧線文となる。ＲＬの磨消縄文が施される。

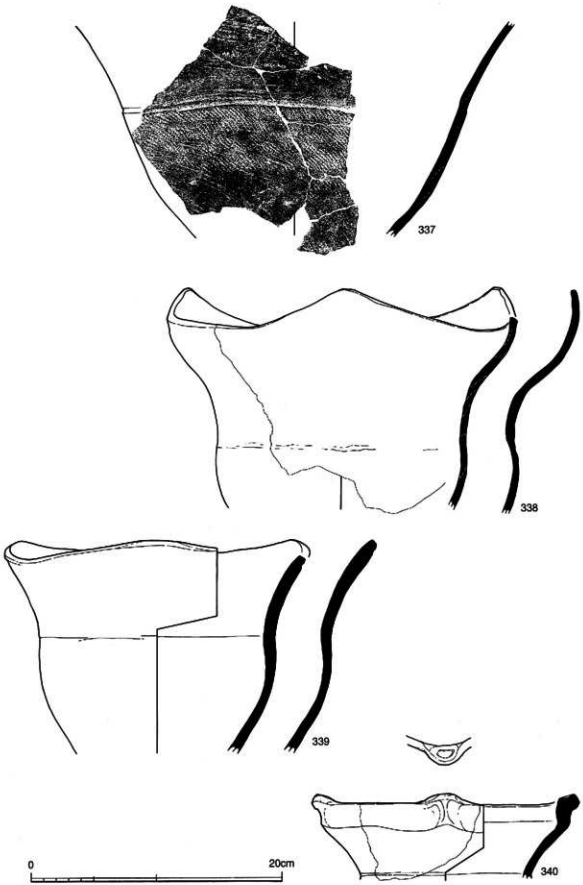
広口浅鉢（312～315）；312は口唇部に垂直刻みを配列する。刻みの単位は平行に並ぶ２個一対となり、そのような工具による押捺的手法を想定させる。313は口縁が波状を呈す。波頂部は突起状となり、平担にした頂部には刻み込んだような凹みがある。波頂肩部にあたる口唇部には沈線施文がみられる。314も波状か。口縁部内面には側縁沈線で添わせたＵ字状凸帯が配される。315は口唇部周辺に文様を集中させた皿形浅鉢。口縁部内面に垂直刻み帯を置くほか、口唇部および口縁部外面に刺突沈線を配し、その間になる口縁外面端部に二枚貝腹縁刻みを斜位に施す。

波状口縁浅鉢（316）；口縁波頂部突起にあたる。沈線様押し引き刺突を多用し、突起の内外面および頂部ともに施文をみる。緩く内屈する口縁部には末端刺突の平行沈線文。各沈線上下は斜刻みを充填する。また、口縁部内面にも１本の沈線がひかれ、その内を斜刻帯とするようである。突起頂部には巻貝回転擬縄文も認められる。

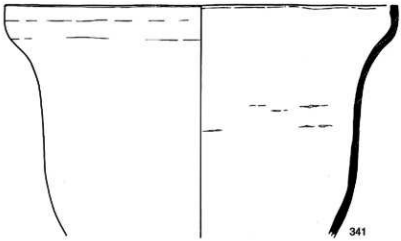
平口縁浅鉢（317・318）；317は内屈口縁をもつ浅鉢の胴部か。器壁薄く、調整はナデにより比較的丁寧。内面に赤色顔料の付着がみられる。318は直前段４本撚と思われるＲＬ磨消縄文施文の内屈口縁。屈曲下にも沈線が配され、そこに補修孔と思われる焼成後穿孔があけられている。

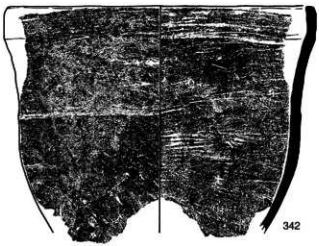
注口付土器（319～331）；319は頸部をもち、内屈させた口縁部に２個一対の把手を取り付ける形式の注口付土器と考えられ、把手の形状等からして関東地方を中心に広域に分布する加曾利Ｂ１式のものと判断される。把手は垂直に立ち上がる円筒状部分と受け鉢状の部分とからなり、縦位橋状に跨ぐように孔を有する。320は鉢形の体部より屈曲して立ち上がり口縁にいたる器形と思われ、段によって画された口縁部に把手が取り付く。把手は上端を扁平に拡張した円柱状部分と正面観三角形の突起部分からなり、両者を繋ぐように縦位橋状把手を構成する。段部以上の口縁部は平行沈線文、段部直下は二枚貝押捺手法による擬縄文帯とし、以下胴部には大柄な円形壺匠の文様を描くようである。322も同様の形制。口縁部に横に振った耳状の突起を有する。突起上の谷間には刺突沈線を施し、突起下にも刺突沈線による「６」字状円文を配す。縄文はＲＬ。321は広口短頸で、摩滅顕著。ただし内面の接合痕及び指押さえ痕は明瞭に残る。323、324は強く内屈する頸部から緩く内彎して若干の面取りをする口唇部にいたる器形。前者はＲＬ磨消縄文に刺突列を配し、後者は平行沈線間に擬縄文状にヘラ状工具による垂直刻みを充填している。325は平行沈線間にＲＬ磨消縄文を配する胴部で、屈曲部にはヘラ状工具による垂直刻みを施す。文様全体の構成は明らかでないが、平行沈線間の磨消部を縦位に連携するような弧線状単位文の存在が窺われる。326は323、324同様の口縁形態をとり、屈曲下には短い頸部が取り付く。口縁部には平行沈線がひかれ、逆「ノ」字状の沈線文を２ヶ所に配する。摩滅著しい。327は所謂ＵＦＯ形の注口付土器。無文の肩部より内屈する口縁部は有段口縁をなし、上半帯上端には二枚貝腹縁刻擬縄文が施文され、無文帯をへて沈線で表現された段部にいたる。上半帯には馬蹄形状凸帯、直下の下半帯には二枚貝腹縁で刻んだ「ノ」字状凸帯を配す。口縁下半帯は定型的文様構成をとっており、二枚貝押捺充填による中央擬縄文帯が凸帯を竿とした三角形旗状を呈し、先端を対向させて連続する。無文肩部以下の胴部文様帯もまた定型的。凸帯の直下に当たる部分に逆「ノ」字状沈線文を縦位に２個描き逆「３」字状の単位文とする。中央擬縄文帯はそれを連結する平行沈線に二枚貝押捺充填。屈曲直上の最下擬縄文帯は口縁部同様二枚貝腹縁刻みによる。328の胴部文様は刺突列を間に充填した平行沈線により描かれ「８」字状を呈す。屈曲直上は垂直刻み帯となる。329は文様帯を縦断する「Ｃ」字状の太い刺突沈線を描き、短弧線で上下と繋いだ中央擬縄文帯とそれとで逆「ト」字状の擬縄文帯を構成する。擬縄文は二枚貝押捺手法によっている。330は327と同様の形制をとる。ただし、口縁部は断面三角形に肥厚し、内を向く口唇部には沈線を巡らしている。口縁部下半帯には、所々末端を刺突する沈線により半円形重弧線を描き単位文とする。縄文はＲＬの磨消手法。一部を除いては、さらにその上から二枚貝を押捺充填し、縄文と擬縄文とが重複する。331は無文小型の注口付土器。算盤玉状の屈曲した胴部から短い口頸部が立ち上がる。内面には粘土紐接合痕および指押さえ痕が明瞭に残る。粘土紐の接合単位は幅1.3cm程度、それぞれが円環状に完結することから積み上げ手法によるものと考えられる。332は緩やかなカーヴにより構成される壺形土器。注口部の有無は不明である。形態の上での類例は先行する時期の東部九州地方にみられる。頸部が若干強めになでられるほかは、横走向の巻貝条痕によって調整が施される。その他の注口付土器とは異なり、内面は比較的丁寧になでられている。

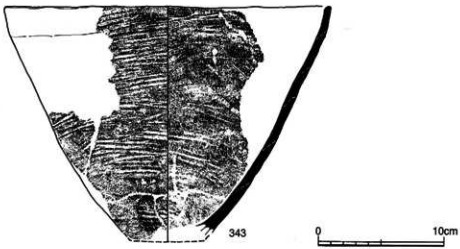
底部（333～336）；333は体部より突出気味に底部にいたり、底面は平たい。突出部分の一部が剥離しており、底部基盤として円環状の粘土紐を置いた後、内部を充填する手法が看取される。334は凹底。全体的にナデにより調整されている。内面に赤色顔料が付着する。335は直に伸び上がる体部下半をもつ深鉢底部。底面は凹底。336も凹底であるが、中心が粗面、外周が平滑面となる。なお、外周のはみ出し状粘土が中心粗面に被っている。



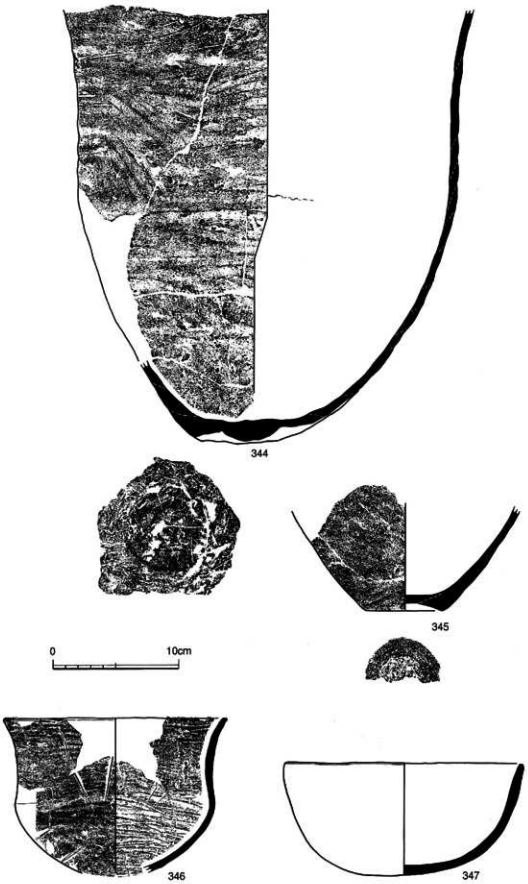
第63図　南区縄文下層9層出土後期土器-6



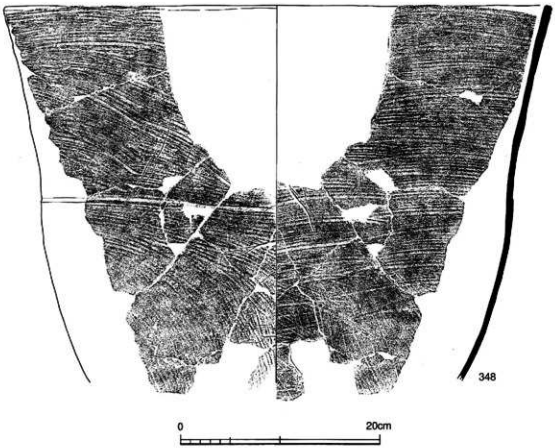




第64図　南区縄文下層9層出土後期土器-7



第65図　南区縄文下層9層出土後期土器-8



第66図　南区縄文下層9層出土後期土器-9

縄文地土器（337）；外面斜走向の巻貝条痕調整による深鉢頸胴部。強いナデを施すことにより段を作出し、頸胴部界となす。胴部には直前段２本撚のＲＬ縄文を数段におよんで横位回転施文する。

無文土器（338～348）；338から340は波状口縁深鉢。338の口縁部は外反する頸部から内彎して立ち上がり、３単位の大きな波頂部を形成する。内外面とも巻貝条痕調整後のナデであるが内面は丁寧である。口縁部および胴部内面の内彎する部分にスス状のものが付着する。339は外反する広口の口頸部で、３単位波頂となる。胴部内面が丁寧なナデ調整となる以外は、巻貝条痕調整後にナデが施される。340は無文ではあるが突起を有する。突起頂部には深くない凹みが圧されている。体部は横走向ナデ調整。頸胴部界には外屈する部分に段が作出されている。341から343は平口縁深鉢であるが、343は砲弾形の形制を呈し、口縁部外面に若干の稜をもたせ、内屈口縁状にしたものである。341は内彎口縁。全体的にナデ調整が施されるが、頸胴部内面に粘土紐接合痕、それに被るように指押さえ痕と思われる斜位に平行な凹凸が認められる。342は内屈口縁で、頸胴部界に段を設ける。器面は条痕調整後のナデ調整であるが、内面にはなで残しがみられる。343は外面を横走向の巻貝条痕が覆う。内面は条痕調整後なでているが、下半は不徹底である。348は推定口径54cmをはかる広口深鉢。緩く内彎しつつ立ち上がる胴部に横位１本の凹線状に作出した段をもって頸胴部界を画し、口頸部は直行する。内外面とも巻貝条痕が顕著に残る様から調整過程が復元できる。胴部は横位ないし右下がりの斜走向で上下を帯状に分かち施されている。口頸部も右下がり斜走向で、右下から左上へと引き上げる動作を上方へ移行しつつ繰り返し、口縁部にいたり、左側へと調整域を移している。一方、内面は胴部上半に横走向の条痕顕著なの

に対し、下半は横位のほか縦から右下がり斜走向の条痕が磨面上に散在しており様相が異なる。内面の炭化物の付着および外壁の被熱によると思われる色調変化はこの下半部分に対応している。344は大型長胴の深鉢体部で、底部まで遺存する。体部全体は横走向のナデ調整によるが、調整時の乾燥状態を反映してか、なでられた粘土の移動状態は部分により異なる。底部は外周平滑な凹底であるが、一方向から圧し潰されたように大きく歪み、その上に木葉痕が圧着している。その様子からは通常のヘソ状凹底が形成されて後、半乾燥段階で自重その他の要因により傾き潰されたことが想定される。底部内面は凹底の中心をはずれて平坦面をもっており、指押さえ痕が多くみられる等、補修の様子を窺わせる。345も深鉢底部でヘソ状凹底。外面は右下がり斜走向巻貝条痕後のナデ調整。内面は幅1.9cmの板状工具により横走向に丁寧なナデ調整を施す。また、底面より4.5cm以上の内面部分には帯状にスス状の付着物がみられる。広口鉢の346は外反する口頸部をもつ。外面および口頸部内面は条痕後のナデ調整によるが、胴部内面は横走向の巻貝条痕を顕著に残す。347は椀形浅鉢。内外面ともナデ調整である。

8．8・10層（縄文黒色土層）出土の土器（第67～168図）

本層においては各地区ごとに上位から人工層位による段階的取り上げをおこなった。したがって、その細分単位は「回数」で表され、その数は深度に比例して大きくなる。M20区およびL20区では特に堆積が厚いため、取り上げ回数も多く7回以上を数える。

包含される土器は元住吉山Ⅰ式および同Ⅱ式が主体であるが、回数の大きい下部において元住吉山Ⅱ式は検出されていない。また、N列以東の地区においてもその下部同様の土器群が主体となることから、本層堆積の上下細分の可能性とそれらの空間的偏在性を指摘することができる。遺物取り上げ時に明瞭に分けられたものではないが、上部が8層に、下部が10層にそれぞれ比定できるものと判断される。

ところで、本層出土資料は莫大な量であるので、本項には掲載できていないものが数多くある。したがって、実測図作成段階において各種の選別、抽出をおこなった。ここに本項における実測図掲載の方針を明記する。調査時の遺物抽出状況と堆積のあり方、精査回数から、M20およびL20区が層位的傾向を窺うものとして資料化に最適であると判断された。また南北にはNライン、東西には21ラインで堆積物の断面観察および測量をおこなっているので、M20区は両方向の断面を東壁と南壁で共有することになる。それゆえM20区は資料化するのに最優先すべきものとの結論にいたり、その資料を中心に抽出をおこなった。抽出にあたっては、復元可能個体のほか、器種、口縁部突起、文様のヴァラエティー等を提示するよう努めたため、ここに掲載されたものがそれらの数量的比率を反映しているわけではない。その他の地区については、復元可能個体を中心に特徴ある破片資料を選別したため、それらにより空間的遍在傾向等が把握できるものではないと考え、実測図掲載にあたっては「その他の地区」として一括し、本層出土土器の全体的様相を看取できるよう器種ごとに配列した。ただし、先にも指摘したとおり、N列以東の地区は元住吉山Ⅰ式でも古相の土器が主体的に包含されているようなので、それのみ別途掲載している。なお、掲載資料については別冊写真図版に収録しているが、そこでは出土層位、地区、および精査回数ごとに編集しているので参考にされたい。同時に、それらの詳細なデータについては「個遺跡デジタルデータブック（仮称）」に収録する予定である。

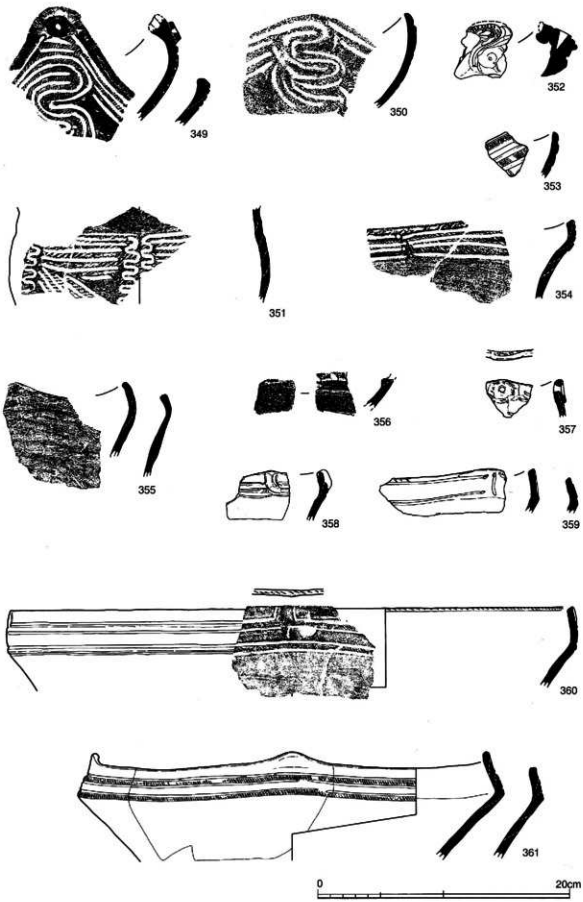
N・O20～22区（349～388）；元住吉山Ⅰ式1期までの資料が中心となる。

349から351は北白川上層式3期とされるものに特徴的な3単位波状口縁深鉢に比定される。349、350は内彎口縁で、波頂下に曲線状文様を配置する。349は「S」字状に蛇行する沈線文を口縁に添って上

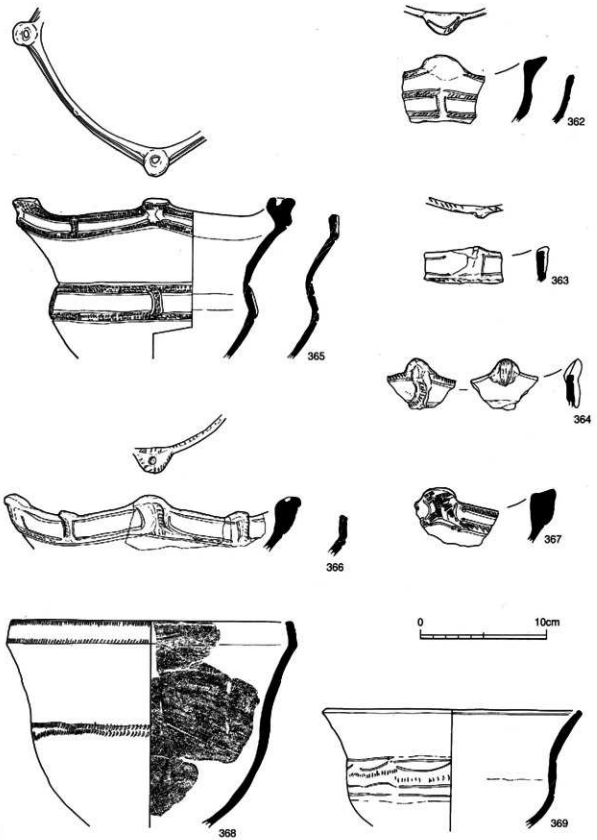
昇してきた平行沈線が囲繞し、多重の縦位蛇行文となる。蛇行文直上には横位の平行沈線文、その上には刺突を打たれた円形の貼付突起が配される。波頂部にも刺突が見られるが、欠損しているため損なわれた部分も含めた突起の全形は不明である。文様部分に細かめのＬＲ縄文が充填される。350は摩滅著しい個体。349同様、口縁部に添った沈線が波頂部下で蛇行して垂下し、それに添って弧線がとりまく文様構成をとる。352は口縁波頂部を「８」字状の突起とし、その内部を深く刺突する。口縁部に短く内屈するものとなろうか。ＬＲ縄文を充填施文する。351の深鉢胴部は緩い段で頸胴部界を区画する。胴部には６単位で一周するように相対する２条の縦位蛇行沈線を配し、それらを５ないし６本の平行沈線でもって胴部最上帯にて連結する。さらにまた、一方の上部と他方の下部を右下がり斜位の多重沈線によって結んでおり、文様部分にＬＲ縄文を充填する。353は内彎内屈口縁と推定される。太い沈線にＲＬ磨消縄文。口縁上端部は絡げ縄状のものを配す。外面沈線内に赤色顔料が残存している。屈曲が緩いものの、354も内彎内屈口縁である。口縁部は末端を刺突する太めの沈線文に直前段３本撚と思われるＲＬの磨消縄文。口縁部最上帯には結節縄文が配されるが、そこのみ磨り消されて縄文は不明瞭となる。355は無文ながらも波状を呈する内彎口縁の深鉢形土器。炭化物の付着顕著である。356は浅鉢形土器の口縁部付近。内面に断面三角形の隆起帯を有し、その上面付け根部分に右下がり斜位の刺突を施している。内面に文様帯をもつ関東地方・加曽利Ｂ１式の皿形浅鉢に類似する。

以下は一乗寺Ｋ式から元住吉山Ｉ式に相当する。357は有段内屈口縁をもつ深鉢波頂部。上半無文帯には凸帯を円形に貼り付け、中心穿孔、二枚貝押捺擬縄文施文。孔の周囲には４ヶ所に刺突が配される。周孔凸帯直下の下半帯にも別に凸帯の剥離痕が認められる。358も有段内屈口縁であるが、下半帯は幅狭く、１本のみ沈線をひく。上半無文帯に取り付く凸帯は逆「ノ」字状を呈し、下半帯にまで被る。359は内屈口縁の波頂部。縦位に間延びし両端を刺突した逆「ノ」字状沈線文を単位文とする。縄文は不明瞭。360は平口縁深鉢と思われ、有段の内屈口縁には、口唇部に斜刻み、上半無文帯に緩い逆「ノ」字状の有刻凸帯、下半帯に平行沈線間のＲＬ磨消縄文を配す。凸帯直下の下半帯には緩い「Ｃ」字状沈線文を描く。361も有段内屈口縁。波状口縁深鉢であるが、波頂部の上半無文帯に凸帯は取り付かず、山形にせり上がっている。下半帯は平行沈線間のＲＬ磨消縄文である。362もまた有段内屈口縁であるが、上半帯上端にも二枚貝押捺擬縄文による施文がみられる。波頂部には頂部を平坦にし弧線文を配した突起が付される。下半帯にも逆「ノ」字状凸帯の貼付をみる。363は「ノ」字状の突起状凸帯を付す内屈口縁で、口唇部および屈曲部に斜刻みを施す。364は波頂部口唇に内面を縦位短沈線でえぐった突起、その下に「ノ」字状の凸帯を配す。凸帯上および口縁部には二枚貝腹縁刻みを充填する。４単位の波頂部に頂部を刺突した突起を配す365は波状口縁深鉢。波底部のほか、胴部文様帯にも逆「Ｃ」字状の凸帯を付す。口縁部は内屈、同様に胴部も屈曲して、屈曲直下には沈線をひく。胴部における屈曲下沈線施文例は稀少である。また、擬縄文状に充填された刺突も該期の近畿地方にみられる手法ではない。色調は黒褐色を呈し、胎土には所謂金雲母が多く含まれる。胎土、手法等の特徴から中部・東海地方の土器との関連が窺われる。366は波状口縁の浅鉢。頂部に刺突をもつ逆「ノ」字状突起、波底部にも縦位の突起を配す。口唇部のほか突起頂部の刺突周囲および突起上には斜刻みが施されている。なお、屈曲部を中心とした内面には赤色顔料が付着している。同器種同箇所の付着例は京都府一乗寺向畑町遺跡、森山遺跡等に認められる。367も波頂部突起。突起は若干逆「ノ」字状に流れ、その上に二枚貝押捺擬縄文を充填する。その他口縁部はＲＬの磨消縄文である。

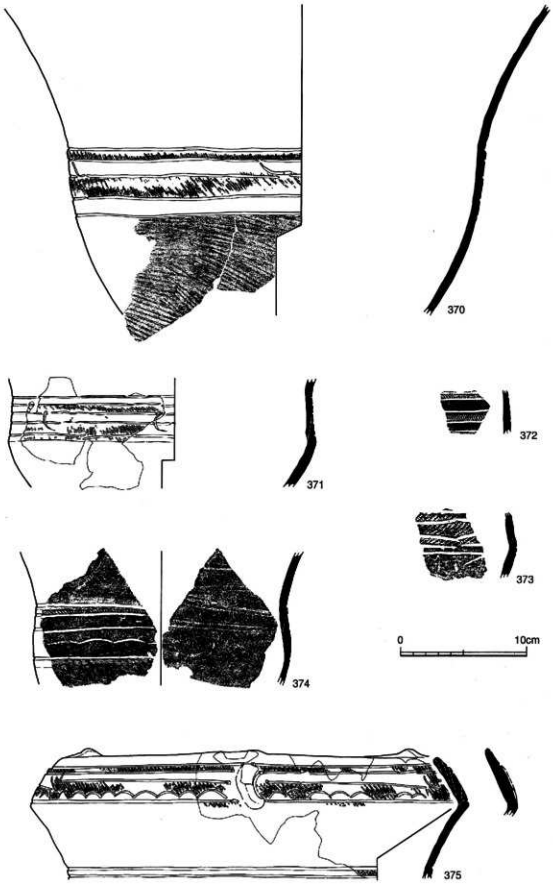
368は平口縁深鉢。内屈する口縁部および胴部には二列にわたる斜位の刻目帯を配す。刻みは台形状



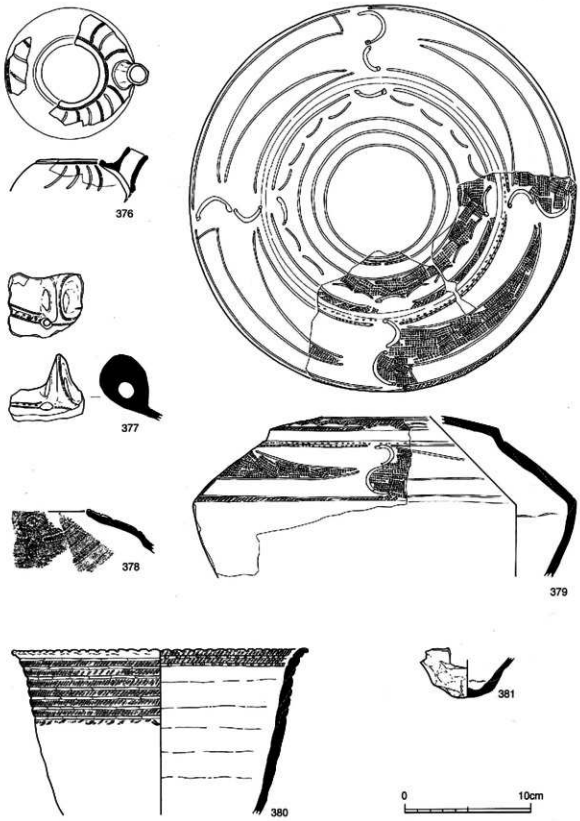
第67図　南区縄文下層8・10層出土後期土器（N・O20～22区）-1



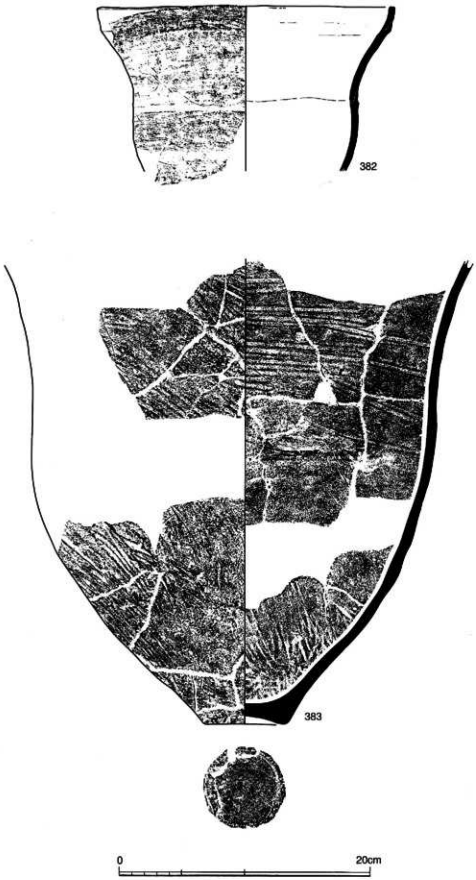
第68図　南区縄文下層8・10層出土後期土器（Ｎ・Ｏ20～22区）-2



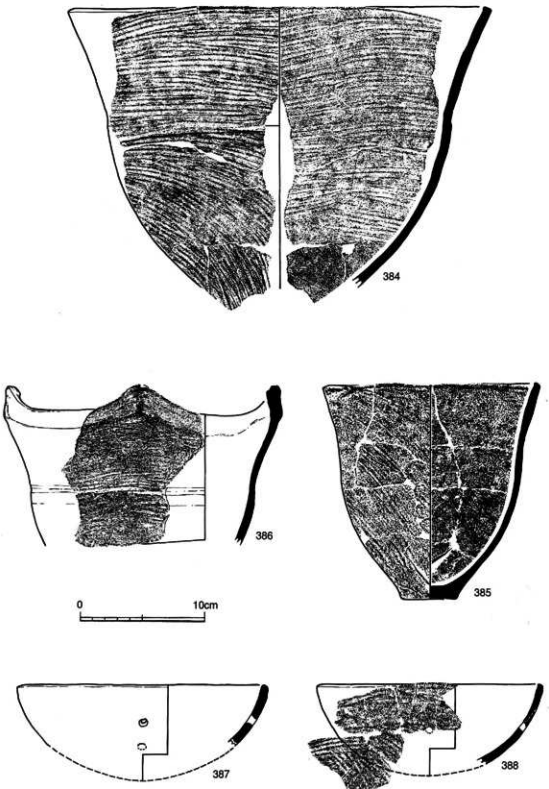
第69図　南区縄文下層8・10層出土後期土器（N・O20～22区）-3



第70図　南区縄文下層8・10層出土後期土器（N・O20～22区）-4



第71図　南区縄文下層8・10層出土後期土器（N・O20～22区）-5



第72図　南区縄文下層8・10層出土後期土器（N・O20～22区）-6

を呈し、その他のものと形状が若干異なる。鉋状の工具を使用したものか。369は広口鉢。外反する口頸部内面には１本の沈線がひかれるほかは無文である。胴部には平行沈線で画した内に対弧連弧文を描き、中央には垂直刻み列を配している。370から374は胴部破片。370は外反する頸部下に段と沈線をもって画された胴部が内彎しつつ底部へと向かう。胴部には平行沈線がひかれ、直前段４本撚ＲＬの磨消縄文。最上縄文帯からぶら下がるように、末端を刺突した逆「ノ」字状沈線文が配される。体部は巻貝条痕顕著、胴部下半以外はなでられている。371は内屈する深鉢胴部であるが、最上帯は無文、以下一帯おきに縄文施文部分とされている。直前段３本撚と思われるＲＬの磨消縄文である。単位文となる「Ｃ」字状沈線文は縄文帯を下限する第３沈線下に配される。372は定型的文様構成をとるが、擬縄文帯には二枚貝腹縁刻みを充填している。明瞭に内屈する373は直前段２本撚ＬＲ縄文地に上下対弧の長連弧文を描く。屈曲下にも沈線が配されている。374も定型的文様構成をとる深鉢胴部。頸胴部は軽い段と沈線で画されている。最上帯および中央帯は直前段３本撚ＲＬの磨消縄文となるが、最下帯のみ二枚貝押捺擬縄文となる。375は３単位の突起が取り付くと推定される平口縁深鉢。内屈する口縁部は幅広く、沈線で画した最上帯を無文とし、有段口縁状を呈する。上半無文帯に突起は取り付くが、その下の下半帯には逆「ノ」字状凸帯が側沈線を伴わずに配される。文様構成は下半帯のみで定型的。ただし、中央縄文帯の上限沈線は右下がりの斜位に傾きをもち、左端が縦位の短沈線で最上縄文帯に連結され、右端が同様にして最下縄文帯に連結されることによりクランク状を呈す。一方の下限沈線は弦長の短い下弦連弧文となる。波底部に対応する突起・凸帯間の単位文は両端刺突の逆「ノ」字状沈線文。縄文は直前段４本撚と思われるＲＬで磨消手法による。なお、頸部は短く、段および沈線で画される胴部にいたる。

376から379は注口付土器。376は胴部内屈して口縁部にいたる無頸形。短い円筒状の注口部が取り付く。胴部には「ノ」字状の弧線文を並列させ、描線は交互に刺突沈線を用いる。最大径にあたる腹部は擬口縁状に剥離している。377は段および刺突沈線で画された無文帯の口縁部に横位に孔のある環状の突起が取り付く。突起の上面観は若干逆「ノ」字状を呈し、そこには口唇部にまで連続する斜位の刻みが施される。段直下は平行刺突沈線間のＲＬ縄文帯で、刺突列が配される。焼成後穿孔になる補修孔がみられる。378は無文の肩部を有する扁平な器形である。口縁部は有段で、上半無文帯には周囲を刺突沈線で縁取った円形凸帯、下半帯には逆「ノ」字状凸帯を配す。下半帯は定型的文様構成をとり、凸帯を竿とした三角旗状文が刺突沈線で描かれる。凸帯上および上下の擬縄文帯は二枚貝腹縁刻みによる。379も同様の形制であるが、口縁上端部の様子は欠損のため不明。無文肩部以上の口縁部は幅広の定型的文様構成をとり、中央擬縄文帯の下限を両端刺突弧線文とする。そのうち、４ヶ所と推定される要所の弧線は太めの沈線で描かれており、それ以下の胴部単位文も同様の描線を用いている。胴部単位文は「Ｃ」、逆「Ｃ」字状弧線を縦に連ね、全体として逆「Ｓ」字状を呈する。巻貝回転施文による擬縄文帯は定型的文様構成をとり、中央擬縄文帯の上限が左端を最上帯に接する斜線、下限が水平ながらも左端で縦位短沈線を配して最下帯に連結することにより、右なびきの三角旗状文となる。一方、最上帯は口縁、胴部とも下限を刺突沈線で画し、内を刺突列とする点その他の部分と異なっている。外面の擬縄文部分には赤色顔料が塗布されていた痕跡が認められる。380は口縁部が外反して開くほかは緩く内彎しつつ底部にいたるバケツ形の深鉢。内面には粘土紐接合に伴なう凹凸がみられる。口唇部には竹管状工具の側面押捺による刻み列が配され、口縁は細波状を呈す。口縁部内面には粗な間隔に刺突を圧した２本の平行沈線文にＬＲ縄文を充填する。外面も同様にして平行沈線文に縄文充填するが、沈線の描法は

軽い押し引き状で内面とは異なる。類似した好例は見いだし得ないが、北陸地方酒見式に固有の深鉢に器形等の上での関連が認められる。胎土の様相も若干異なる。381は手づくねの底部。

382は口縁、胴部に巻貝回転擬縄文を施文した平口縁深鉢で、頸胴部は段によって画す。383は無文深鉢。頸部から胴部までの遺存であるが、広口のものと想定される。内外面とも巻貝条痕調整、胴部内面のみ丁寧になでられている。内面でも底部に近い部分はナデが十分におよばず、縦位に近い右下がり斜走向の条痕が認められる。それ以上の頸部等は右から左への横走向。外面胴部は右下から左上へ掻き上げる斜走向である。なお、外面には所々接合痕が認められる。384も広口深鉢。内外面とも巻貝条痕顕著で、頸胴部界には巻貝を横引きした段を設ける。それ以上の口頸部は右から左の横走向、胴部は右下から左上への斜走向の条痕で、内面は底部近くが丁寧になでられるほかは横走向の巻貝条痕で調整を終えている。また、内面条痕の軌跡は左端で折り返している様子が観察され、縦長帯状を単位として調整面を移行していることが理解される。385は頸部くびれの緩やかな広口深鉢。外面においては器面全体を右下から左上の巻貝条痕が通っている。一方、内面は丁寧になでられるが、粘土紐接合痕が一部残っている。386は波状口縁深鉢。波頂部には頂部に凹点を配した突起を付し、頸胴部界は軽い段で画する。いずれの器面調整も巻貝条痕後のナデ。387、388は有孔皿形浅鉢。口縁部よりやや下がった位置に縦位に2個ないし1個の焼成前穿孔を施す。外面巻貝条痕顕著であるが、内面は丁寧になでられる。388の内面には赤色顔料が付着している。

M20区最下部（389～464）；389から394は波状口縁深鉢の波頂部。389のみ内彎口縁で、逆「C」字状の突起を付す。直下には縦位に3本の弧線が配されるようであるが詳細は不明。390は直前段4本撚ＲＬ縄文地に「6」字状沈線文を配す内屈口縁。392は単位文が逆「ノ」字状を呈す。391は有段内屈口縁。上半無文帯に両側沈線を添えた有刻逆「ノ」字状凸帯、直下に同形の沈線文を配し、下半帯は平行沈線間ＲＬ磨消縄文とする。同様に有段の393は口唇部には刻み、頂部に刺突を配し、幅広に緩く逆「ノ」字状を呈す有刻凸帯が上半無文帯に取り付く。下半帯に単位文はなく、平行沈線間のＲＬ磨消縄文である。394は無段の内屈口縁で、若干肥厚させた波頂部に穿孔をみる。孔を中心とした円形肥厚部分両側には縦位の短沈線を従え、半行沈線文に連結して枠状をなす。ＲＬ磨消縄文。口唇部には垂直刻みが施されている。ＲＬ縄文地の399は内屈する口縁波頂部に、無文の400は緩やかに内彎して立ち上がる口縁部に逆「ノ」字状凸帯を配す。395は有段口縁部。沈線区画の上半帯上端部には二枚貝腹縁刻みによる擬縄文、下半帯はＲＬ縄文を施す。396は内彎する口縁部を有する鉢形土器。最上端部を無文帯とし、以下の平行沈線文にはＬＲ縄文を充填する。397から406は内屈口縁の平口縁深鉢。397はＲＬ縄文地に平行沈線文および逆「ノ」字状沈線文を配す。398は対弧弧線文間に低位凸帯を配し、その上を刻む。401と402は同一個体。ＬＲ縄文地に一方は沈線内刺突をもつ平行沈線文を描く。垂直突起上には頂部から連続する刺突沈線、頂部に別に刺突を配す。そのものではないが突起部分に限れば石川県米泉遺跡に類例がある。403はＲＬ縄文地に平行沈線文。404は403とともに内面屈曲部における強めのナデが認められる。口縁部には縄文地に平行沈線を描くが、屈曲直下の沈線から鍵手状に逆「C」字状単位文をぶら下げる。縄文は胴部ともにＲＬに撚り戻しのかかったＲＬを逆巻きしたものを用いている。405は直前段4本撚ＲＬ縄文地に2本の平行沈線文。406は内彎内屈口縁で、ＬＲ縄文である。407から412は胴部。407は屈曲した小型の深鉢胴部で、定型的文様構成をとる。最上帯および中央帯下限は刺突沈線を描線として用い、また、明瞭な屈曲により最下帯は下限されているにもかかわらず、その部分と屈曲下に沈線を配す。最上帯は刺突列、中央と最下帯は直前段4本撚ＲＬ磨消縄文で、中央縄文帯に重